## 大宰府条坊跡

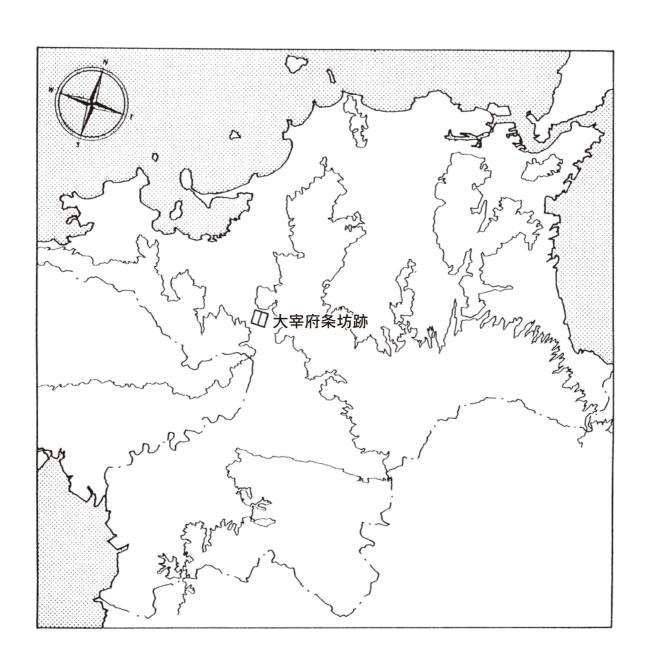
第155次発掘調查

筑紫野市文化財調查報告書

第82集

# 大宰府条坊跡

### 第155次発掘調査



### 例 言

- 1. 本書は共同住宅建築に伴い筑紫野市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2. 発掘調査は(株) 三愛建物の委託を受けて、筑紫野市教育委員会・社会教育課(当時) が実施した。
- 3. 調査対象地は、筑紫野市大字塔原480番地の1(当時)で調査対象面積821.50㎡である。
- 4. 試掘調査から契約に至るまでの業務は、奥村俊久(当時社会教育課文化財担当主事)が行った。
- 5. 発掘調査は、渡邊和子(当時社会教育課文化財担当技師)が行った。
- 6. 調査にかかる個別遺構の実測および写真撮影は渡邊が行い、全体の遺構図については(株)東亜 建設技術に写真測量を委託した。
- 7. 報告にあたっては、遺構の性格付けを行い、竪穴住居跡をSI、土坑をSK、溝状遺構をSD、 性格不明遺構をSXの略号とし、番号については、遺物取り上げの番号をそのまま付した。
- 8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
- 9. 本報告で記載する時期区分については、下記の文献を参考にした。 「大宰府条坊跡Ⅱ」太宰府市の文化財第7集 太宰府市教育委員会 1983
- 10. 本書で示す土層や遺物の色については、農林水産省農林水産技術会・(財) 日本色彩研究所監修 「新版 標準土色帳」を基準とした。
- 11. 報告書掲載の挿図の製図は、(有)文化財テクノアシストに委託した。
- 12. 挿図中に使用した方位は、すべて座標北を指し、磁北を示す場合は、挿図中にG.Nを記している。
- 13. 本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

## 目 次

木	文
1	$\sim$

	頁				頁
1. 調望	<b>室に至る経過 4</b>		⑤P :	i t(柱穴) ·······	30
2. 位置	置と環境 4		⑥その	の他の出土遺物 30	• 31
3. 調査	をの内容		4. まと	_め	31
①S ]	「(堅穴住居跡)… 5~11・14				
上出	<b>二遺物 17・18</b>				
2 S F	て (土坑) 19・22				
出日	上遺物 24・25・26		表		
3 S I	)(溝状遺構)27		表-1	SI一覧表	17
出二	上遺物 27		表-2	SK一覧表	
4 S X	《(性格不明遺構) 30		表-3	SD一覧表	28
出出	上遺物30		表-4	出土遺物観察表 32	• 33
Fig (‡	重図)	頁			頁
Fig.1	周辺遺跡分布図(S1/25,000)	1	Fig.19	SX-03出土遺物実測図(S1/2)	30
Fig.2	周辺地形図(S1/2,500)	2	Fig.20	SX-01実測図(S1/60)	30
Fig.3	全体遺構配置図(S1/200) 折り込み	+	Fig.21	Pit出土遺物実測図(S1/2)	31
Fig.4	SI-01~04·06実測図(S1/60)	6	Fig.22	その他の出土遺物実測図(S1/2)	31
Fig.5	SI-05·07·08実測図				
	およびSI-05カマド実測図(S1/60・1/40)	8	PL. ( <u>*</u>	写真図版)	
Fig.6	SI-09~11実測図および		PL.1	全景写真	3
	SI-09カマド実測図(S1/60・1/40)	10	PL.2	SI-02~05	7
Fig.7	SI-12~15実測図(S1/60)	12	PL.3	SI-06 ⋅ 08~10	9
Fig.8	SI-16~21実測図(S1/60)	15	PL.4	$SI-11 \cdot 12 \cdot 14 \cdot 17$	13
Fig.9	SI-01 · 02出土遺物実測図(S1/2)	17	PL.5	SI-16 · 18 · 19	16
Fig.10	SI-09出土遺物実測図(S1/3・1/2)	18	PL.6	SI-01・02出土遺物	17
Fig.11	$SK-01 \cdot 03 \cdot 04 \cdot 06 \cdot 07$		PL.7	SI-09出土遺物	18
	実測図(S1/40)	20	PL.8	$SK-01 \cdot 03 \cdot 07 \cdot 10$	21
Fig.12	SK-08~11実測図(S1/40)	22	PL.9	$SK-06 \cdot 09 \cdot 10 \cdot 12$ ,	
Fig.13	SK-01・02出土遺物実測図(S1/2)	24		$SD-01 \cdot 02$	23
Fig.14	SK-03出土遺物実測図(S1/6・1/2)	25	PL.10	SK-01・02出土遺物	24
Fig.15	SK-04・05出土遺物実測図(S1/2)	26	PL.11	SK-03~05,SX-03出土遺物	26
Fig.16	SD-01・02実測図(S1/60)	27	PL.12	SD-01出土遺物	29
Fig.17	SD-01出土遺物実測図(S1/2)	28	PL.13	Pit出土遺物	31
Fig.18	SD-01出土遺物実測図(S1/3)	29	PL14	その他の出土遺物	31

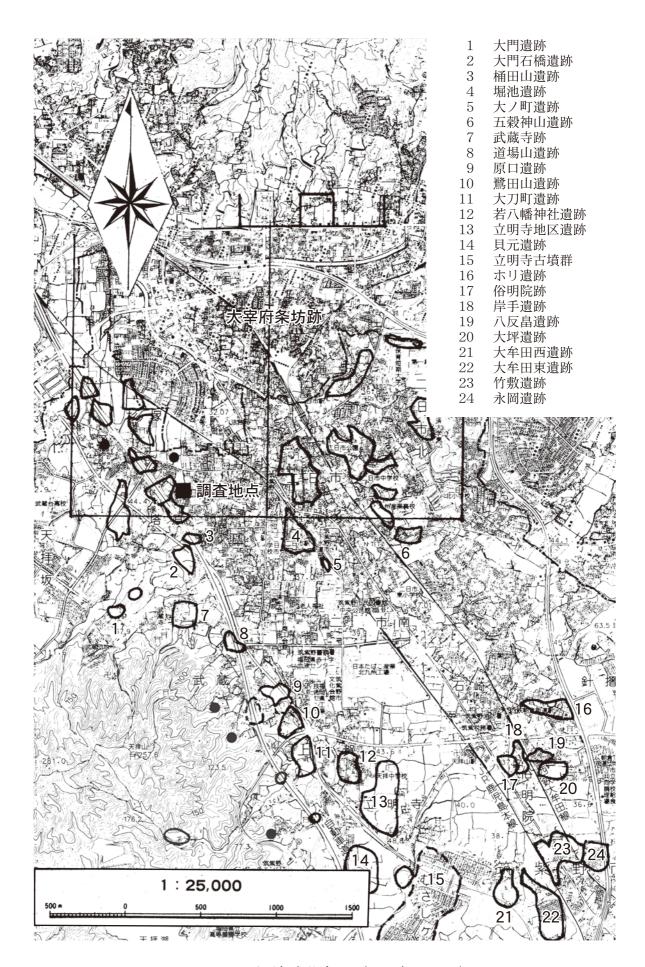


Fig.1 周辺遺跡分布図(S 1/25,000)

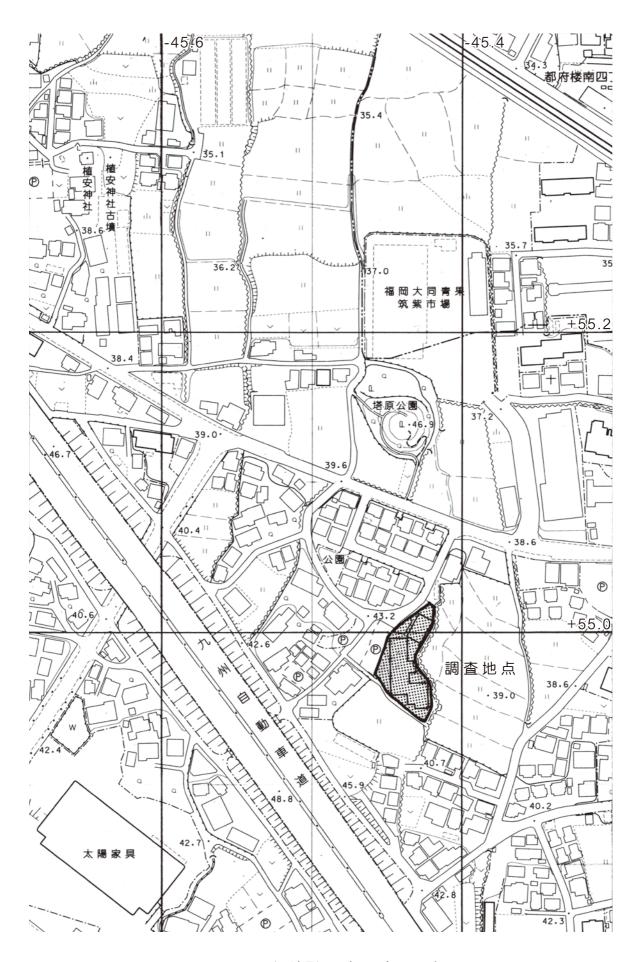


Fig.2 周辺地形図(S 1/2,500)



東南から





南から



PL.1 全景写真

### 1. 調査に至る経過

平成5年10月10日付けで株式会社三愛建物(以下(株)三愛建物)より筑紫野市教育委員会に対して、共同住宅建築に伴う「埋蔵文化財の所在の有無について」の照会があった。

当該地(筑紫野市塔原480番地)は、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するために、工事着手60日前までに文化財保護法第57条の2第1項の届出の必要性と工事計画の内容から事前の確認調査の実施を指導した。事前の指導に基づき、平成5年10月25日に市教育委員会が試掘確認調査を実施した。この結果、開発対象地の西側半分に遺構が検出されたことから、確認調査の報告並びに文化財保護上必要な協議を当該事業者と行った。その後同年11月2日に(株)三愛建物より埋蔵文化財発掘の届出(文化財保護法第57条の2第1項)が提出され、市教育委員会は直ちに福岡県教育委員会に進達した。同年12月10日付けで県教育委員会より発掘調査を実施する旨の通知がなされた。

これを受けて(株)三愛建物は、「文化財発掘調査委託申請書」を市教育委員会に提出し、具体的に発掘調査に係る協議を進めた結果、翌年7月以降に発掘調査に着手する方向で合議に至った。

平成6年6月16日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を交わし、同年7月1日から8月31日までの二ヶ月間発掘調査を行った。また出土品の洗浄・復元については平成6年度中に完了した。なお開発対象地の面積は2.001㎡であるが、遺構の検出された面積821.50㎡を調査対象地とした。

### 2. 位置と環境

筑紫野市は福岡平野の南東部に位置し、北から東にかけては三郡山系の四王寺山、愛嶽山、宝満山などの山々が連なり、西には牛頸山、矢岳、城山などの牛頸低山地から続く背振山系が控え、その両山系に囲まれた盆地的な様相を呈す狭小な小平野部に市の中心部が位置している。またこの平野部は福岡平野と筑紫平野の分水嶺ともなっている。市の北部は太宰府市と境をなし、市内には鷺田川が流れ、太宰府市通古賀付近で合流して御笠川となり、牛頸川などの幾つかの河川と合流しながら福岡平野を北流し、博多湾へと注いでいる。

大宰府条坊跡第155次調査地点は、鏡山猛氏の「大宰府都城の研究」による右郭二十二条十坊に位置し、背振山系の天拝山(標高257.6m)から北に延びる一丘陵の先端部近くの裾部にあって、標高は現地表面で約29.3mを測る。

この丘陵上には福岡県教育委員会が、昭和48~49年の九州縦貫道建設に伴う調査で確認された唐 人塚遺跡がある。この唐人塚遺跡からは弥生時代や古墳時代、平安時代の遺構が多く検出されてい る。また周辺地域でも建築行為や都市計画道路建設に伴う発掘調査が行われ、弥生時代から近世に 至るまでの遺構が検出されている。

確認調査では平安時代の土坑等が検出され、周辺地域の調査と同様な時期の遺跡である可能性があった。また唐人塚遺跡の裾部にあたる事から、平安時代より以前の遺構が残っている可能性も考えられた。

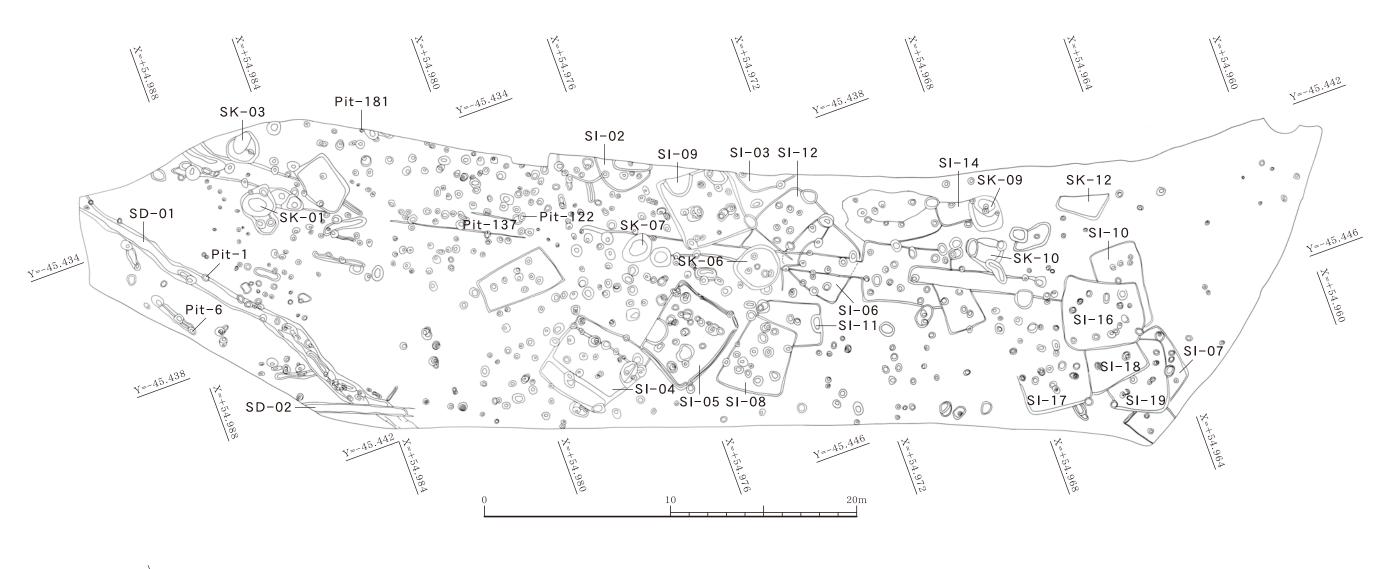




Fig.3 全体遺構配置図(S 1/200)

### 3. 調査の内容

調査予定地の現状は、丘陵裾部を削平して平らに地形改変されている。このため高低差のある田として三段に分かれている。確認調査の結果では高位段にある田は丘陵部を大幅に削平し、あたかも崖下のような様相を見せる。そのため遺構はまったく検出されていない。また下位の段の田は小谷にあたるため、ここでも遺構は検出されていない。遺構が遺存するのは中段位の田で、ここが調査対象地である。調査地を概観すると西側がわずかに高く東側に向かってやや下がっていく、東側が下がるのは東側にある田への上り降りを考えて削平されたためである。このため遺構の多くは、西側から中央部にかけて集中し、南端側ほど遺構の遺存状況も悪い。

検出された遺構は、SI(竪穴住居跡)21軒、SK(土坑)12基、SX(性格不明遺構)1基、SD(溝状遺構)15条、Pit(柱穴)200個である。また掘立柱建物跡としてまとまるPitは確認できなかった。

### ①SI(竪穴住居跡)

SI-01は調査区のほぼ中央部よりやや東側にあってSI-02に切られる。遺構の大半は下段の田の改変のため削平されている。検出できた壁の形状から円形住居跡と考えられるが1/4しか遺存していない。壁の立ち上がりは緩やかだが、残りも悪く5~8cmしか測れない。遺物は埋土中からは弥生時代と思われる少量の土器の小片だけが出土した。

SI-02はSI-01を切って、SK-05によって切られる。形状は隅丸長方形を呈する住居跡と思われる。 大きさから土坑かとも考えたが、床面に踏みしめと汚れが確認できたので住居跡とした。しかし壁 の遺存状況は非常に悪く清掃すると壁が消失する状態で、やっとプランだけの範囲確認ができた。 これも出土遺物は少片ばかりで明確な時期は判別できない。

SI-03はSI-01・02より南側にある。これも遺構の大半は削平されているが、隅丸方形の住居跡と考えられる。検出した範囲には主柱穴は確認できないが、やはり床面の踏みしめと汚れの状況で住居跡とした。出土遺物はなく時期の確定はできない。

SI-04、調査区の西側よりの丘陵部側にあって、SI-05に切られている。やや不整な方形の形状を呈し、両端にベッドが作られている。ベッドは盛土で作られず、地山を削りだしたものである。主柱穴は二本でベッドに架かるように掘られ、深さ30cm程度を測る。検出時に床面の踏みしめ部分と汚れを掘りすぎたために平坦でない。北側の壁が10cmとやや残り良く、西南側の壁は2~3cmしかない。出土遺物は、弥生時代と考えられる細片が少量だけだった。

SI-05はSI-04を切る。これも形状は不整な方形を呈す住居跡である。北東コーナー付近にカマドが配されている。カマドの土層及び本体を観察すると遺存状況は良くないと判断された。潰れた状況であるために袖部の残りは悪い。またカマド内部の炭混じりの土も前庭部付近に堆積していた。焚口にあたる部分の天井も遺存していない。カマドの基底面は地山を削り出し、その上に粘土混じりの土を積んで袖を構築する。両袖を構築していたと思われる土には少量の粘土しか使用されていない。火床には強い熱変化はなく厚みもさほど見られず、余り使用された様子は見られない。壁の立ち上りはやや直に近い所と斜めに緩やかな部分が見られ、10~25cmの高さを残す。カマドの作られた北東側を除く三方の壁には壁溝が廻る。しかし壁溝中には杭跡は検出できなかった。壁溝は断面U字状を呈し、深さ3~5cm程度である。また床面の汚れは少ないが、踏みしめは顕著である。出土遺物は少片のため図示できるものはなかった。

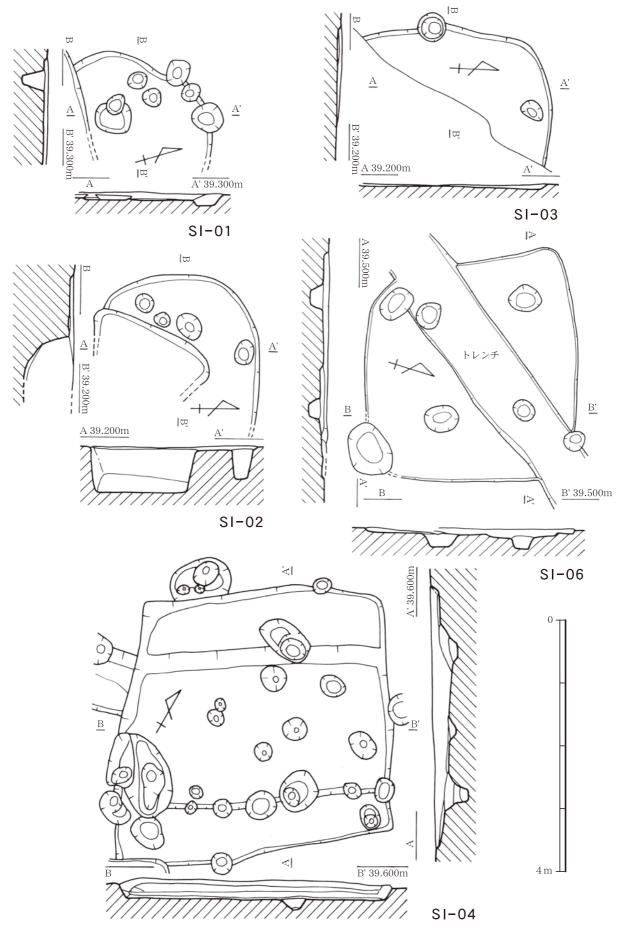
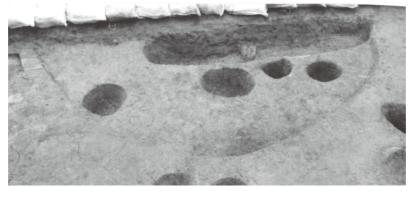


Fig.4 SI-01~04·06実測図 (S 1/60)



SI-02



SI-03



SI-04



SI-05

PL.2 SI-02~05

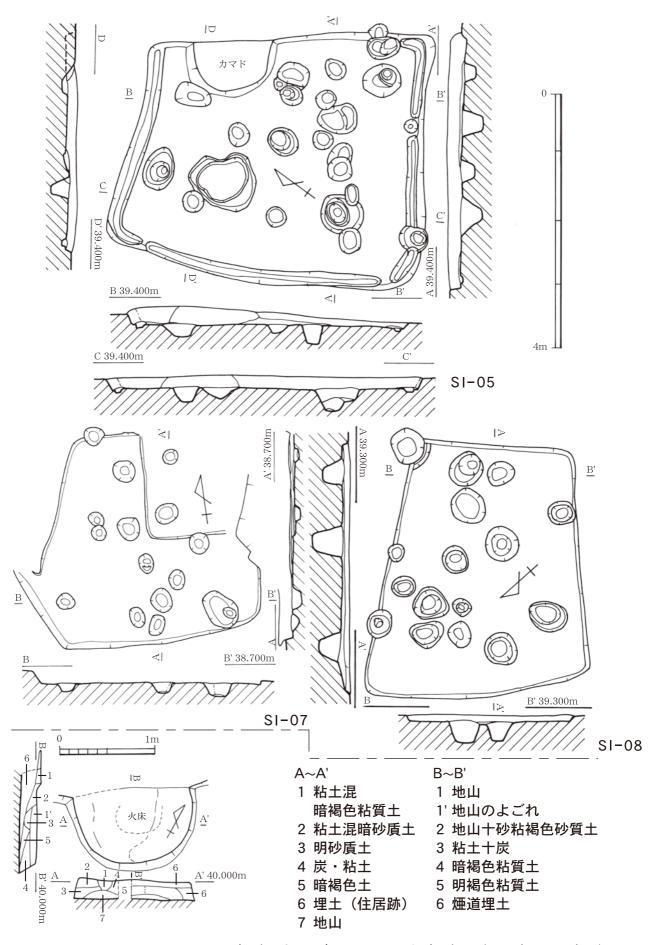
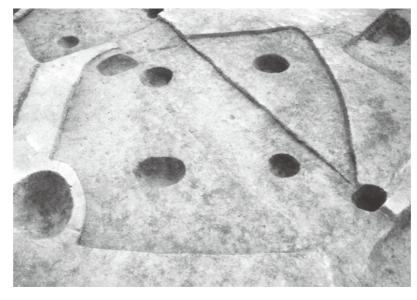


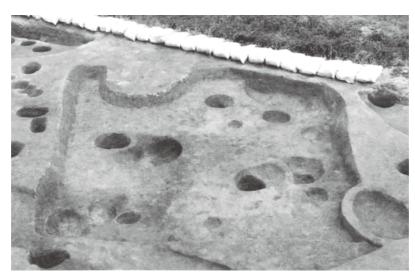
Fig.5 SI-05・07・08実測図およびSI-05カマド実測図(S 1/60・1/40)



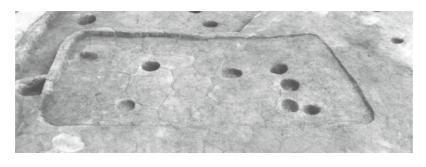
SI-06



SI-08



SI-09



SI-10

PL.3 SI-06 · 08~10

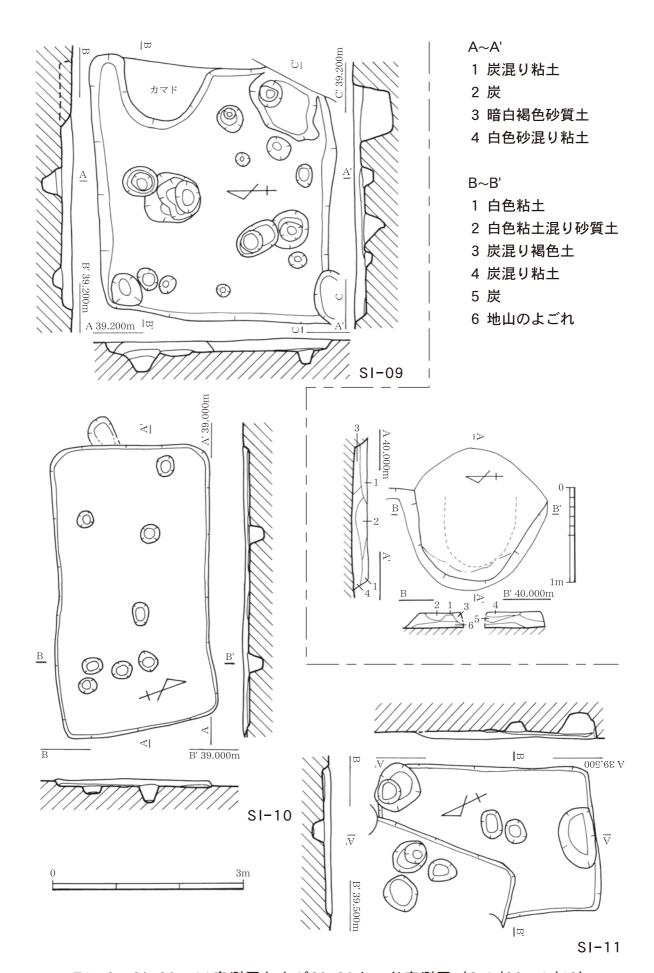


Fig.6 SI-09~11実測図およびSI-09カマド実測図(S 1/60・1/40)

SI-06は確認調査のトレンチとSI-12に切られる。トレンチが北側コーナー部から南東コーナー付近を通るためこの付近の壁の立ち上りは浅くなっている。形状は不整な方形を呈し、壁の残りは悪く、深さは $3\sim5$  cmしかない。良好な遺存状況ではないが、床の踏みしめが確認できる。また主柱穴は4本で柱間は $1.8\sim2$  mを測る。主柱穴の柱列方向は四方向の壁の軸線に平行している。遺物は細片が少量出土しただけで図示できなかった。このため住居跡の時期は不明である。

SI-07、調査区の南西側、遺構の密度が薄くなる端に位置する。この南西側は下段の田に降りる場所に当たるため調査区の中では地山が低くなっている。また遺構の集中する箇所で切りあいが著しい。SI-19に切られているが、SI-19もSI-18・16などに切られている。このために南壁側しか残らず、主柱穴は確認できなかった。また壁の残りも悪く、5cm程度しか残っていない。現存する南側壁と東西のコーナー部分から推測すると本来の形状は隅丸方形あるいは隅丸長方形と考えられる。出土遺物はなく、住居の時期は不明である。住居跡の埋土は暗茶褐色である。

SI-08は調査区のほぼ中央部の丘陵側にあって、SI-15に近接して、SI-11を切る。形状は不整な長方形を呈す。西側の壁が東側に比べやや長くなり、このため変形した形となっている。壁の立ち上りは緩やかだが、残りは悪い。床面には踏みしめや汚れが認められる。主柱穴は2本と考えられる。出土遺物は少なく細片ばかりで、時期の確定ができない。

SI-09は調査区の中央部に位置し、SI-02・03に近接している。南東コーナー部分が下段の田の改変により削平されている。また北西側のコーナー付近も確認調査のトレンチにより切られているためこの付近の壁の残りは悪い。東側壁の北よりにカマドが配されている。これはSI-05のカマドの位置と同様に壁の中心部に作られず、ややコーナーに寄った位置に配されている。カマドの配置状況は、この2軒の住居跡は類似している。ただ主柱穴がSI-05のように明確にならなかった。カマドも残りが悪く袖の構築に用いられた粘土もまったく確認できない。焚口付近の天井もなく、検出時にカマドの中心付近に炭混じりの埋土が堆積していただけである。また火床も薄く、しかも強度の熱を帯びた痕跡はない。壁の立ち上りは部分的にはやや直になるが、緩やかに外傾している。壁から床までの深さ20cm前後を測る。調査区内の住居跡では遺存状況が良い方といえる。床面には貼床はないが踏みしめと汚れは顕著である。遺物は埋土中からの出土も多いが、カマド周辺からも多く出土した。Fig.10に図示したものは全て、この住居跡からのものである。

SI-10は遺構の切り合いが多い所で検出された。これはSI-16に切られSI-17に近接してある。 住居東側および東側と南東部のコーナー付近の壁はやや深めに残る。壁の深さは8cm程度である。 長軸の南半分がSI-16により削平されるが、形状は長方形を呈す。調査区内で検出された住居跡と は形態を異にし、床面には地業としての貼床は認められないが、床面の踏みしめ部分と汚れにより、 今回は住居跡として扱った。床面には数個のPitがあるが、SI-16で検出されたPitも考慮して、ほ ば中央付近の北側壁に並行する二本を主柱穴とした。柱心心間は1.8mを測り、深さは20cmとなる。 Pitは同様な形状を呈し、その埋土も暗褐色土で同様な堆積であった。

SI-11、調査区の中央付近にあり、SI-08に南西コーナー付近を切られて全容を確認できないが、本来の形状は長方形を呈すと思われる。東側壁の中心部に屋内土坑状のものがある。土坑は楕円形の形状をなし、深さ40cmを測る。土坑から住居跡の壁の立ち上がりは直となる。また現状では床面の基底面には貼床などの地業痕跡は認められなかったが、これにも踏みしめ部分と汚れが確認できたため住居跡とした。主柱穴は現状では一本とした。

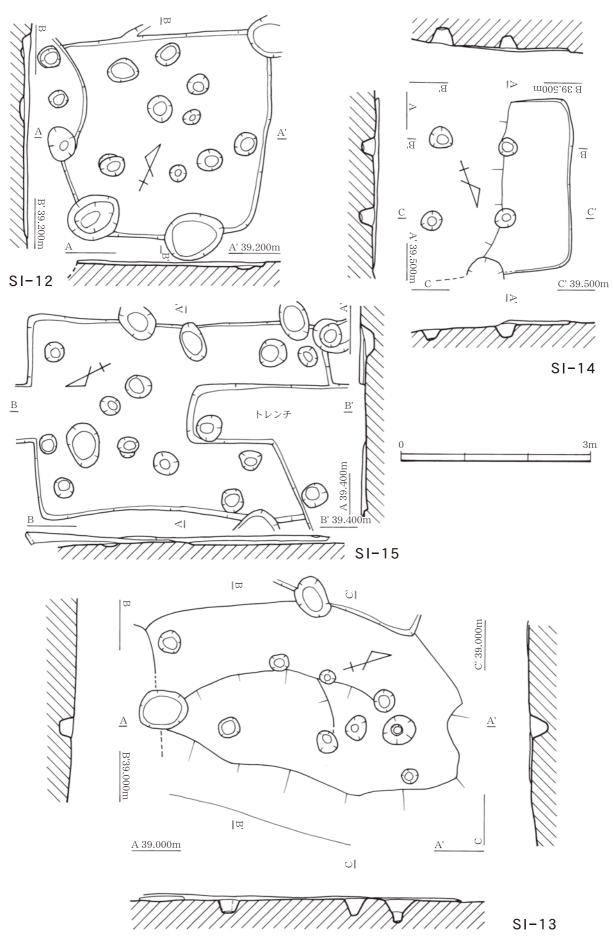
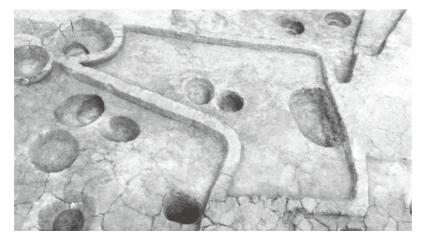
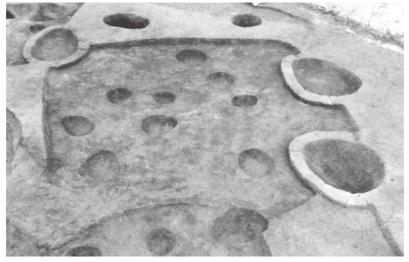


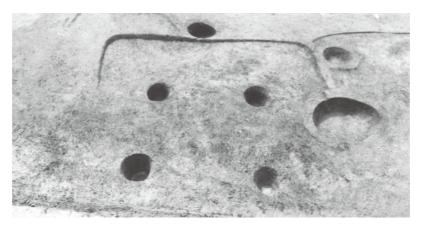
Fig.7 SI-12~15実測図 (S 1/60)



SI-11



SI-12



SI-14



SI-17

PL.4 SI-11 · 12 · 14 · 17

SI-12はSI-09に近接し、SI-06を切る。北・東・南側壁を検出できたが壁の残りは悪く、残りのいい東側壁でも深さは5~7㎝しかない。南西部分を土坑状の遺構に切られて壁が残っていない。この付近に火床らしいものがあり精査したが、カマドは検出できなかった。床面は平坦となるが、踏みしめは確認できない。平面プランは残る壁から不整隅丸方形と考えられる。遺物は少量の破片だけが出土したが、図示はできない。

SI-13の壁体は非常に浅く、床面の踏みしめ状況で住居跡としたが形状は不明。この踏みしめ部分は観察次第では地山と見過ごされるかも知れない。またSI-14に切られる。主柱穴は現状では二本確認できた。出土遺物は細片ばかりで図示できない。

SI-14はSI-13を切って、SK-09に切られる。遺存する床面には、踏みしめ部分がある。SI-13と同様下段の田との境にあり、北半分の床・壁が失われている。しかし柱穴だけは確認できた。これから主柱穴は四本となる。柱間の距離は1.2mを測り、ほぼ等間隔にある。南側の遺存する壁から想定すると住居の形状は、隅丸方形が考えられる。遺物の出土はなかった。

SI-15の東西の壁の中心は確認調査のトレンチにより切られ、また東南コーナーもSI-21にも切られている。北・南の長軸の壁は4.6m、短軸3.2mを測り、比較的形状の整った長方形を呈する。四方向のコーナー部にある柱穴は、長軸・短軸それぞれ等間隔を測り、これが主柱穴と考えられる。床面は踏みしめが確認できる。遺物は図示できるものの出土はなく、時期が確定できない。

SI-16は東側の遺構集中部で検出された。SI-10・17・18を切る。北側の長軸3.4m、南側長軸3.6m で、東側3m、西側3.6mを測る。南西・東南のコーナー部分が隅丸となり、やや不整な隅丸方形を呈する。壁の残りも悪く、 $5\sim7$  cmしかない。床面は平坦で汚れが顕著である。出土遺物も時期の確定できるものはない。

SI-17はSI-16に切られ、SI-18を切る。検出時にすでに北側部分の壁は失われていて、西側の壁しか遺存しない。この西壁の長さは3.4mを測り、北西・南西側のコーナーは隅丸となり、このことから形状は隅丸方形または隅丸長方形と推定される。主柱穴は現状では二本柱とした。遺物の出土は少なく、細片のため図示できなかった。

SI-18はSI-16・17に切られ、南側コーナー部と西壁の一部しか遺存しない。南側コーナー部分は隅丸を呈す事から平面プランは隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定できる。主柱穴は西壁の軸線に平行する柱穴を想定。しかし東側の柱穴は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

SI-19はSI-18に切られ、SI-17・20を切る。南西・東南コーナー部分は丸みを持つ、この両コーナーから平面プランを推定すると隅丸方形か隅丸長方形が予測できる。主柱穴はSI-18を除去後、精査したが検出できない。床面には踏みしめが確認できる。遺物は埋土中からの一点のみである。

SI-20はSI-19に切られ、東側は未調査区へ続く。検出時より全体の1/4程度しか遺存していなかった。SI-19を除去後に東南側のコーナー部の検出をした。コーナー部は丸みを持ち、床面には汚れが確認できた。住居跡の形状は、本来隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈していたと考えられる。また当初、検出していた北東側壁溝の続きは確認できず、壁溝は住居跡を全周せず部分的にあった可能性が考えられる。遺物は細片だけで図示できるものは出土しなかった。

SI-21、トレンチに切られ、SI-15を切る。平面プランはSI-10を小型にした長方形の形状を呈する住居跡である。土坑とも考えたが、やはり床面に踏みしめ部分や汚れを確認できる事から住居跡とした。壁の遺存状況は悪く、出土遺物も細片で図示できない。

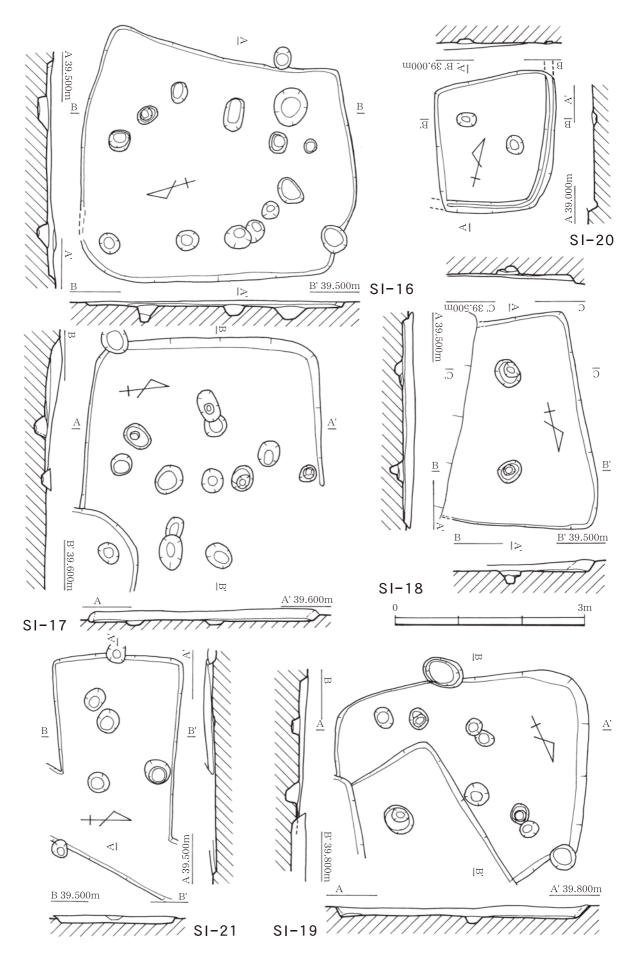


Fig.8 SI-16~21実測図(S 1/60)



SI-16



SI-18



SI-19

PL.5 SI-16 · 18 · 19

	Fi-		大きさ (m)						I		
묵	Fig. 番号	形状	長	人 e e (III)	深	炉・カマド	主柱穴数	面積(mi)	方 位	出土遺物	備考
1	4	円形	2.02+ α 1.94+ α	$1.35 + \alpha$ $1.25 + \alpha$	0.03 0.08		不明	2.37	N-15° -E	須恵器(高台部・かえり部含む) 土師器、弥生土器 サヌカイト(フレーク)	SD 8を切る SI 2・ptに切られる 未満査区へつづく
2	4	隅丸長方形	2.90+ α 2.74+ α	$1.59 + \alpha$ $1.35 + \alpha$	0.02 0.04		不明	4.61	N-2°-W	須惠器、土師器、鉄津?	SI 1を切る SK 5に切られる 未調査区へつづく
3	4	隅丸方形	$3.14+\alpha$ $2.99+\alpha$	$0.98 + \alpha$ $0.80 + \alpha$	0.04 0.06		不明	3.08	N-2°-W	須恵器、土師器 黒曜石(フレーク) サヌカイト(フレーク)	pitに切られる 未調査区へつづく
4	4	不整方形	4.44 4.32	3.77 3.56	0.03 0.22		2	16.78	N-32° -W	弥生土器	pitを切る SL5・pitに切られる
5	5	不整方形	4.86 4.35	3.22 2.92	0.16 0.24	北東	2	15.65	N-27° -W	須恵器 土輝器(口高縁部含む)	SI 4・pltを切る pitに切られる
6	4	不整方形	3.65 3.55	3.37 3.30	0.50 0.69		4	12.30	N-18° -W		SI 12を切る pht・試掘ルンチに切られる
7	5	隅丸長方形または隅丸方形	3.33 3.21	3.26 3.14	0.20 0.26		2	10.86	N-7° -E	須惠器(体部含む) 土師器	SI 16・18・19・ phtに切られる
8	5	不整長方形	3.96 3.85	3.58 3.45	0.07 0.09		2	14.18	N-49° -W	土師器	SI 11を切る phtに切られる
9	6	不整方形	4.02 3.80	3.84 3.42	0.13 0.20	東	2	15.44	N=0°	須惠器(かえり部含む) 土師器(高台部含む) 新石片、鉄淬、碁石?	plt・試掘トレンチに切られる 未調査区へつづく
10	6	長方形	4.58 4.44	2.40 2.30	0.02 0.07		2	10.99	N-20° -E	須惠器(高台部合む)	SI 16に切られる
11	6	長方形	3.40 3.20	2.25 2.15	0.05 0.10		2?	4.40	N-24° -E		SI8・pltに切られる
12	7	不整隅丸方形	$2.92+\alpha$ $2.85+\alpha$	3.20 3.05	0.06 0.10		1	9.34+ α	N-25° -W		SL6・pit・ 試掘ルシテに切られる
13	7	円形?	5.03+ α	3.03+ a —	0.05		2?	15.24+ α	N-17° -E		SI 14・15・pitに切られる
14	7	隅丸方形	$0.96 + \alpha$ $0.92 + \alpha$	2.75 2.60	0.03 0.05		4	2.64+ α	N-19" -E		SI 13を切る SK 9・phに切られる
15	7	長方形	4.75 4.66	3.18 3.02	0.06 0.09		2	15.10	N-27° -E		SI 13を切る SI 21・plt・試掘ルンチに切られる。
16	8	不整隅丸長方形	4.60 4.50	3.32 3.15	0.05 0.11		2	16.78	N-16° -E		SI 7・10・17~19を切る phtに切られる
17	8	隅丸長方形または隅丸方形	$2.60+\alpha$ $2.45+\alpha$	3.84 3.25	0.03 0.14		2	9.98+α	N-7°-E		SI 18・SD 13を切る SI 16・pitに切られる
18	8	л	$2.48 + \alpha$ $2.30 + \alpha$	3.42 3.25	0.09 0.15		4?	8.48+ α	N-13° -E		SI 19・pitを切る SI 16・17に切られる
19	8	л	3.98 3.76	3.26 3.06	0.04 0.24		2?	12.97	N-24° -E		SI 7・20・pitを切る SI 16・18・pitに切られる
20	8	п	$1.85 + \alpha$ $1.73 + \alpha$	2.10 2.00	0.06 0.22		1	3.88+ α	N-13° -W		SI 19に切られる 未調査区へつづく
21	8	長方形	$2.85+\alpha$ $2.70+\alpha$	2.08 1.97	0.03 0.19		2 ?	5.93+ α	N=0°		SI 15を切る plt・試掘ルチに切られる

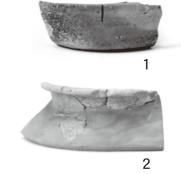
表-1 SI一覧表

### 出土遺物

1はSI-01で図示したが遺構埋土のものでない。須恵器の坏身片で全体の1/5程度しか残っていない。焼成は良好だが体部はかなり歪で器高3.75cmを測る。色調は内面灰白色N7/、外面はN7/灰

白色と一部灰色N6/をなす。外面はN7/灰白色で一部オリーブ黒N5 GY2/1の色調を呈する。外面に自然釉が付着し、ロクロ回転は左である。2は土師器の甕の口縁部片で復元口径17.4cm、残存高3.4cmとなる。焼成は良好。色調は内面明褐色7.5YR 7/1、外面橙色5YR 7/6を呈し、胎土には1.5mmの石英粒を少量含んでいる。これも遺構埋土中の出土でない。SI-09のカマドから出土した3は内面の色調橙色5YR 6/6、外面明赤褐色2.5YR 5/6をなし、外底面はハケ目調整後にナデ仕上げされる。内面の頸部上半部はケ

ズリで下部は指ナデによる調整で指頭 痕を顕著に残す。2.5mm以下の石英や 雲母を含んで、焼成は良い。外面の器 表は摩滅が著しく調整は不明。器高11 .2cmを測る土師器の小型の甕である。 4は土師器甕の口縁付近の破片で残存 高7.5cm、色調は内外共に7.5YR6/4 のにぶい橙色をなす。胎土には砂粒が



PL.6 SI-01·02出土遺物

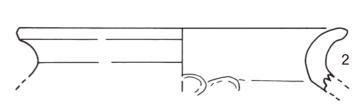
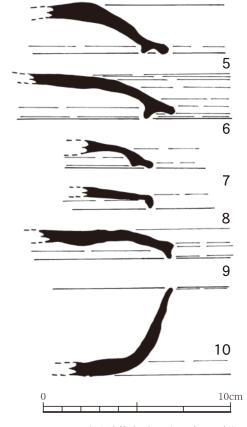


Fig.9 SI-01·02出土遺物実測図(S 1/2)

僅かに含まれるが焼成は普通である。内面には煤の付着が見られる。外面器表面の調整は口縁付近ではナデ、体部はハケ目後ナデを施す、内面はケズリで仕上げている。カマド周辺部より出土した。5はSI-09の埋土中より出土した須恵器の坏蓋で焼成は良好。残存高2.7cmを測り、色調は内外共に灰色 N6/を呈する。胎土には3 m以下の石英、黒色粒が僅かに含まれる。外面天井部は回転ヘラケズリで、天井内面から外面体部までは回転ナデ仕上げで調整されている。かえり部は深く、端部は肥厚し丸みを持つ。6は残存高2.4cmを測る須恵器坏蓋である。天井部外面の調整は回転ヘラケズリで、口縁付近の外面から内面天井部まではナデ仕上げを施す。胎土には5 m以下の石英を微量含んで、焼成は良い。内外面の色調は、赤灰色5R6/1を呈する。かえり部分は5ほどの厚みはなく、ややスマートである。カマド埋土からの出土。7の須恵器坏蓋の残存高は2.6cmを測る。小片のため天井部分の調整等の詳細は不明。口縁付近の外面から内面の体部はナデ仕上げである。色調は内外ともに灰白色N7/を呈す。胎土には角閃石と砂粒を少量含んでいるが、焼成は良好。8は天井部

の低いかえりのない須恵器の坏蓋である。口縁端部は細く形状は 三角形を呈す。色調は内外面ともに灰白色N7/を呈し、焼成は良 好。残存高1.2㎝を測る。焼成は良好である。胎土には1㎜以下の 石英を含んでいる。色調は内外共に灰色N5を呈している。9の 須恵器の坏蓋も天井が低い形状である。口縁部はやや肥厚する。 胎土に1.5㎜以下の石英や雲母を小量含んでいる。残存高は1.5㎝ となる。10は須恵器の坏身片で残存高4.6㎝を測る。1/6程度し か残存していないため、復元口径などは不明である。胎土には5 ㎜程の石英粒を少量含んでいる。調整は、内外共にナデで仕上げ ている。焼成は良好。口縁端部は体部と比較すると細く仕上がる。 色調は内面が灰色N4/で、外面は灰白色N7/を呈す。焼成は良好 である。



3 0 10cm

Fig.10 SI-09出土遺物実測図(S 1/3・1/2)



PL.7 SI-09出土遺物

### ②SK (土坑)

SK-01は調査区の北側で検出され、SD-04とSK-02を切る。遺構の西側にも土坑状のものがあったがプランも明確でなく、遺構自体も浅いため土坑として扱わなかった。またこの遺構とSK-01の新旧関係を確実に掴めなかった。平面の形状は不整な隅丸方形を呈し、床面は浅い皿状となる。床面から緩やかに立ち上がる壁は一度平坦な床面をなし、さらに上場へと斜めに立ち上がり二段になる。遺物は土坑の底部付近から出土した。

SK-02はSK-01に切られSD-04を切る。不整な楕円形の平面プランを呈す。床面は二段になって 南側がやや深くなる。全体に遺存状況は悪く出土遺物も小片ばかりで図示できない。

SK-03はSD-04を切る。平面形状は不整形を呈す。床面の東側には楕円形の浅い土坑状の落ちがあった。 遺構の重複とも考えたが、検出時にはプランは確認できなかった事からSK-03と同一ものとした。遺物は上段の床面から出土した。

SK-04はSD-04を切り、SD-04の南端部付近で検出された。東側壁長1.8mを測り、整ったコーナーとなる。しかし西壁側はくずれた壁のため不整な長方形となる。壁は斜めに立ち上がり、15~20 cm程度の深さとなる。床面は平坦で、中心から南寄りに径20cmのPitがある。遺物は埋土中より少量出土したが、図示できなかった。

SK-05はSI-02を切る。遺構の大半が下段の田へと続くため全容は不明である。壁は垂直に近く立ち上がり床面まで深い。遺物は埋土中から少量出土したが、図示できたものもある。

SK-06は調査区のほぼ中央部分にあって確認トレンチに切られる。平面は不整円の形状をなし、 径2.4~2.3mを測る。壁は緩やかで斜めに立ち上がり、深さ20cmを測る。床面は平坦である。 4 個のPitが検出されたが、すべてがこの土坑に伴うか明確でない。遺物は出土していない。

SK-07も確認トレンチに切られている。北側の壁が南側に比べやや短いために不整な楕円形プランとなっている。床面までの深さは20~30cm前後を測る。壁は斜めに立ち上がるが膨らみを持つ。床面は僅かに波うち平坦でない。遺物の出土はない。

**SK-08**はSK-07の南側にあり、両遺構は近接して位置する。これも確認トレンチにより切られる。 長軸1.2m、短軸は1mで、平面プランは楕円形となる。床面は平坦でなく、壁は急に斜めに立ち上がる。Pitの可能性も考えたが、ここでは土坑とした。遺物は出土しなかった。

	Fig.	We do		大 き さ (m)			ation 1 Sept. 145	
号	番号	形状	長	幅	深	方 位	出土遺物	備考
1	11	隅丸方形	1.92 1.00	1.90 0.85	0.22 0.31	N-14° -E	須恵器(口縁部含む) 土飾器 弥生土器、鉄淬	SD 11・SK 2・pitを切る pitに切られる 中にpitあり
2		楕円形	$1.90 + \alpha$ $1.80 + \alpha$	1.06 0.83	0.25 0.39	N-1°-E	須恵器、土師器 弥生土器 黒曜石(フレーク)	SD 11・pitを切る SK 1に切られる
3	11	不整形	1.73 1.45	1.67 —	$0.10 \atop 0.29$	N-45° -E	須恵器、土師器 弥生土器 砥石、鉄淬	SD 11・SX 2を切る 中にpitあり
4	11	不整長方形	3.00 2.76	2.24 1.85	$0.08 \\ 0.13$	N-5°-E	須恵器 土師器	SD 11・12を切る pitに切られる。中にpitあり
5		不整円	$0.50 + \alpha$ $0.40 + \alpha$	2.07 1.85	0.10 0.40	N-2°-W	須恵器(高台部含む) 土師器、弥生土器	SI 2・pitを切る 未調査区へつづく 中にpitあり
6	11	不整円	2.49 2.18	2.30 2.06	0.21	N-2°-W		pitを切る 試掘トレンチに切られる 中にpitあり
7	11	楕円形	1.60 1.00	1.30 1.09	0.32 0.51	N-34° -W	須恵器 土師器	試掘トレンチに切られる
8	12	楕円形	1.14 0.65	1.00 0.59	0.24 0.38	N-28° -E		試掘トレンチに切られる
9	12	隅丸方形	1.90	1.65 1.25	0.18 0.27	N-14° -E		SI 14を切る 中にpitあり
10	12	楕円形?	$1.35 + \alpha$ $1.20 + \alpha$	1.50 0.90	0.20 0.27	N-33° -E		pit・試梱トレンチに切られる
11	12	長方形	2.11 1.90	1.16 0.94	0.03 0.06	N-12° -W		pitに切られる 中にpitあり
12		隅丸方形	$1.56+\alpha$ $1.40+\alpha$	2.37 2.17	0.09 0.19	N-35° -E		

表-2 SK一覧表

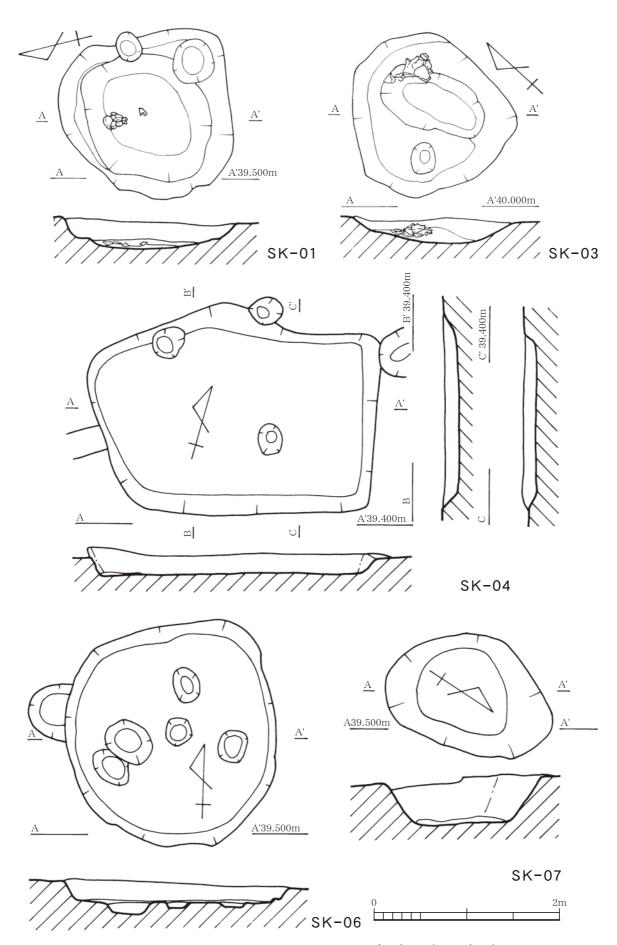
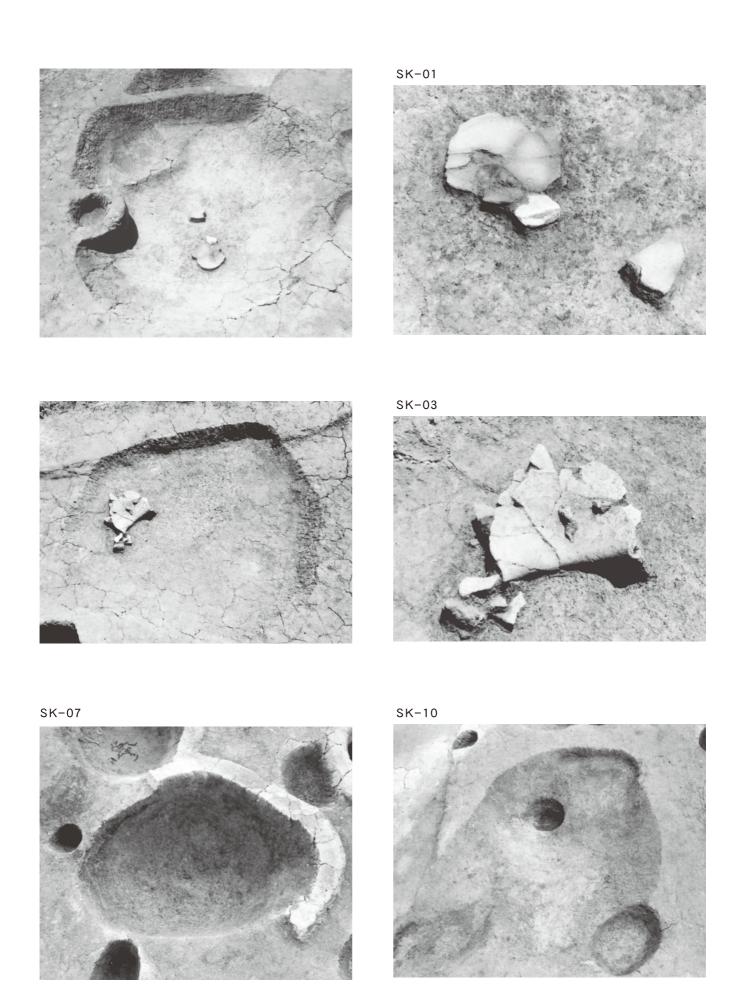


Fig.11 SI-01·03·04·06·07実測図 (S 1/40)



PL.8 SK-01 · 03 · 07 · 10

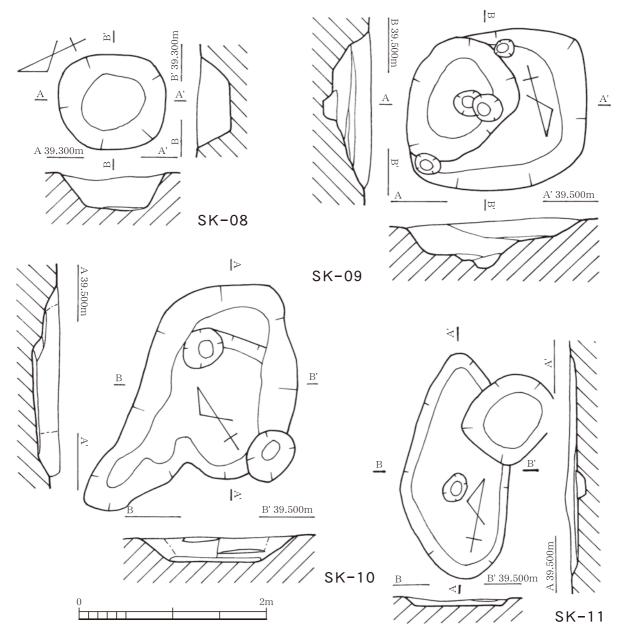


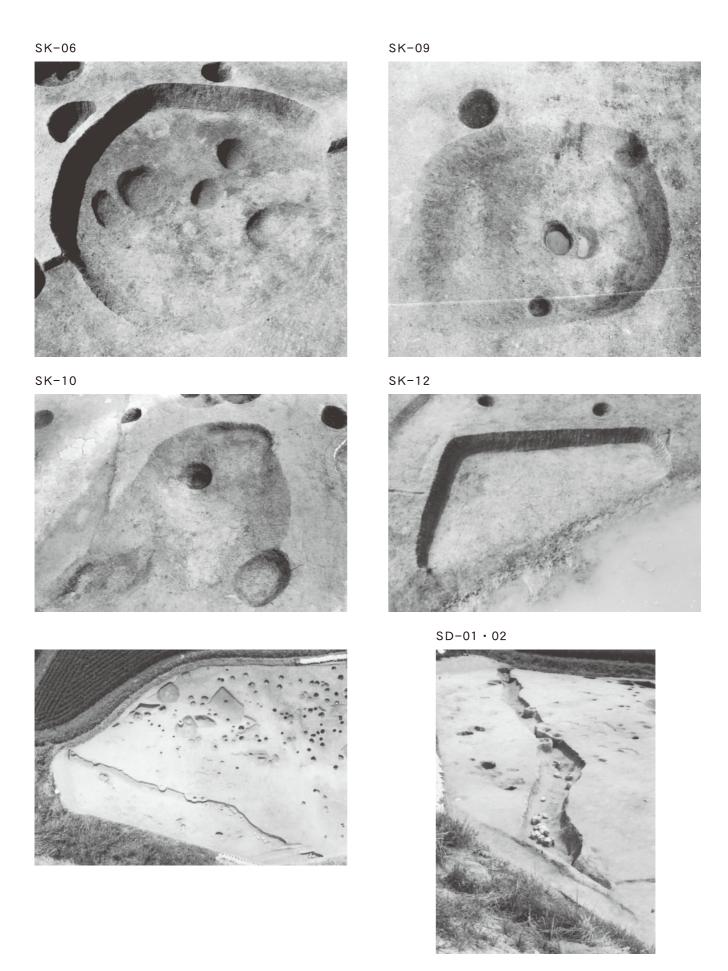
Fig.12 SK-08~11実測図(S 1/40)

SK-09はSI-14を切る。平面は隅丸方形のプランを呈す。床面東側に不整形をなす土坑状の落ちがあり、二段掘りとなる。上段の床面は平坦なテラス状となり、下段の床面は皿状の立ち上りを見せ、また深さ30cm程度のPitがある。

SK-10はSK-09の西側で検出された。コーナー部を全てPitや不連続な溝状遺構に切られているため平面形状は明確でないが、楕円形のプランの可能性がある。土坑の長さは2.1m、幅1.6mを測り、床面は平坦となる。床面の北東側は狭いテラスとなり、二段の床となる。壁は緩やかに斜めに立ち上り、深さ20~30cmを測る。埋土中から遺物の出土をみたが、細片で図示はできなかった。

**SK-11**はPitに切られ、SK-10に近接する。両短辺の壁の形状と長さに差異があって不整な長方形を呈す。床までの深さは5~7㎝前後で、壁は斜めに立ち上がり床面は平坦となる。土坑墓的な形状もあったが調査では確認できず、ここでは土坑とした。遺物は出土しなかった。

SK-12はSK-11東南側で検出した。地形の変換が見られる箇所にあたるため、遺構の半分以上は削平されている。検出できた西・北・南側壁から推測すると隅丸方形の平面プランと考えられる。



PL.9 SK-06 · 09 · 10 · 12, SD-01 · 02

### 出土遺物

11~21までがSK-01からの出土。11・12はかえりを持つ須恵器の坏蓋で、いずれも焼成は良く、胎土には砂粒・雲母・石英粒を含んでいる。色調は内外面ともに灰白色2.5Y 7/1 を呈す。13はかえりのない須恵器坏蓋で残存高2.1cmを測り、焼成は良好。胎土には3mm以下の石英粒を含む。天井部は回転ヘラケズリで、外面体部から内面の調整はナデによる仕上げ。口縁端部は丸みをもつ。色調は内外面ともに赤灰色5R 5/1をなす。14は歪な須恵器坏蓋で、胎土は精製され焼成も良い。天井部から口縁部まで均一された厚みで、口縁端部は丸みを持ち直で体部へと続き、残存高2.1cmで天井部は低い。16は須恵器坏蓋の撮み部片で天井外面にはカキ目が見られる。17は須恵器高台坏片で残存高2.7cm、胎土も精製され、焼成は良好。高台は削りだしである。19は土師器の台付盤で、焼成はあまく胎土には石英粒と雲母を多く含む。全体的に摩滅が著しい。20は須恵器の甕の頸部付近の破片。焼成は良く、胎土には4m以下の石英・黒色粒を含む。21は須恵器の長頸壷の頸部片で、残存高7.1cmを測る。焼成は良好、色調は内外面ともに灰白色N8/となる。

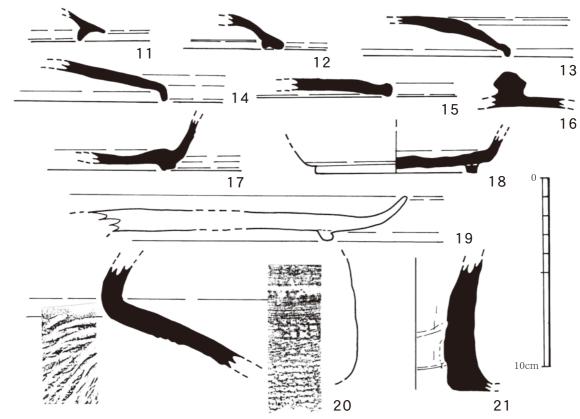
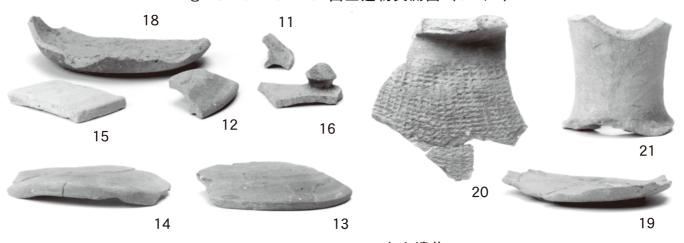


Fig.13 SK-01·02出土遺物実測図(S 1/2)



PL.10 SK-01·02出土遺物

**22**は土師器の台付鉢。体部から底部の1/3が残存する。胎土には $1 \sim 3$  mmの砂粒を少量含み、焼成は普通。内外面はヘラミガキで調整され部分的に煤が付着する。色調は内面及び外面ともに明 赤褐色2.5YR 5/8 を呈し、復元高台径12.3cm、残存高13.3cmを測る。土器は非常に脆く高台の内

側に不明瞭な筵状圧痕があり、煤も付着する。 23は土師器の甑で全体の1/3程度残存し、復 元口径29.2cm、残存高24.4cmで、胎土には7mm以 下の石英・赤色粒を含む。内外面の器表は摩滅 が著しく調整は不明。内面はケズリ仕上げとな る。色調は内面がにぶい褐色7.5YR 6/3で外面 橙色7.5YR 6/6を呈す。24は復元口径30cm、 残存高26.1cmの土師器の甑片である。胎土は 1~5㎜の砂粒と赤褐色土を含む。色調内外とも 黄橙色10YR 7/8を呈す。焼成はややあまい。 内外面の調整は器表面が剥落して不明。25~ 29はかえりのある須恵器の坏蓋である。25 ・26・27は小片のため調整は不明。いずれ も焼成は良く、胎土もわりに精製される。また 色調は内外面ともに灰白色N 8/もしくは灰色 N6/を呈している。28は口縁部から体部まで残 存する。残存高2cmで胎土には2mm以下の石英 粒を少量含んで焼成も良い。29は残存高2.75 cmの蓋の破片で、色調は内外面ともに灰色N6 /を呈す。胎土に1mmの砂粒を少量含んで、焼成は 普通。ロクロ回転は右方向で、調整は内外面と もにナデ仕上げで口縁端部はシャープである。

29

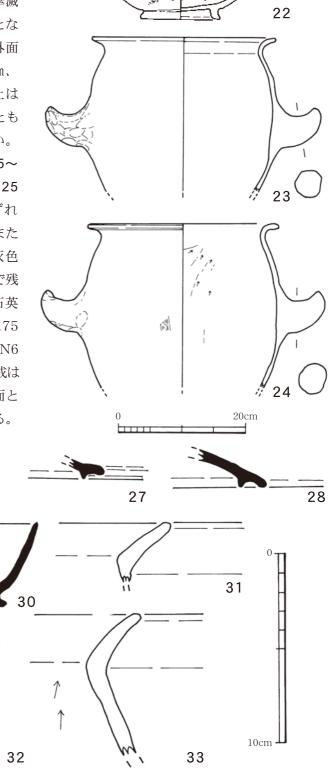


Fig.14 SK-03出土遺物実測図(S 1/6・1/2)

26

30は小型の須恵器の高台坏で、全体の1/3残っている。復元口径8cm、復元高台径4.8cm、器高4.4cm を測る。色調は内外面ともに暗青灰色5B3/1を呈す。胎土には0.5mm程の砂粒を少量含み、焼成は良好。調整はナデ仕上げとなる。高台端部は跳ねた形態をとる。31~33は土師器の甕の口縁片。いずれも器表面の摩滅が著しいために調整は不明で焼成は普通である。32は小型で胴部中位に最

大径があり、復元口径12.7cm、残存高5.9cmを測 る。色調は外面にぶい橙色5YR6/4、内面は浅黄橙 色7.5YR 8/4を呈し、胎土に0.5mmの砂粒を少量含 む。31・33の口縁部は、くの字状に外反する。 33は残存高7.5cmで胎土には3mm以下の石英粒・ 雲母を含むが、焼成は良好。内外面の色調はにぶい 黄橙色10YR 7/2を呈す。SK-05から出土した34の 須恵器の坏蓋は、器表面の摩滅が著しいため調整 不明。胎土に1mm以下の石英・雲母を含んでいる。 焼成は普通である。色調は内外面ともに灰白色N 8/を呈し、残存高は2.5cmとなり、やや天井の 高い須恵器の坏蓋と思われる。35は天井部の低 い須恵器の坏蓋片。37は須恵器の高台坏。復元 口径14.7cm、器高4.2cm、復元高台径9.6cmを測る。 内外面ともに灰色N5/を呈す。焼成は良く、高 台は低いものが貼り付けられている。

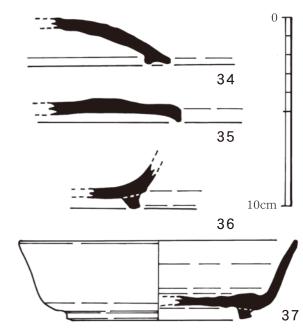
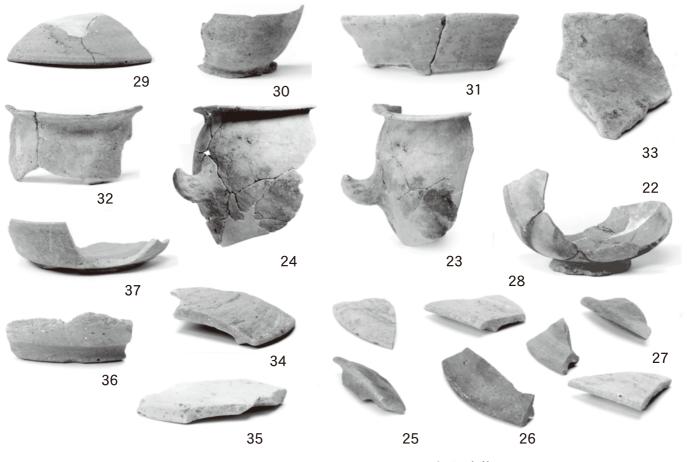


Fig.15 SK-04·05出土遺物実測図(S 1/2)



PL.11 SK-03~05,SX-03出土遺物

# $\underline{\mathbf{A}}$ <u>A</u>' В $\underline{\mathbf{c}}$ B' 39.700m C' 39.700m A' <u>39.70</u>0m SD-01 3m

Fig.16 SD-01·02実測図(S 1/60)

### ③SD (溝状遺構)

溝は全部で15条検出された。

これらの中には不連続で短く終息する ものや幅が狭く小土坑状のものがある。 いずれも底面までの深さが非常に浅い。

SD-01は調査区の北西隅にあり、北東側から南西側に、やや蛇行しながら13m延びる。ここから逆くの字状になり西方向へ延び、この屈曲部分より溝の幅も広くなる。幅は北東端は0.9m、屈曲部分の最大幅1.2mとなる。南西隅でSD-02と切りあっている。深さは北東側で18cm、折れ点で26cm、SD-02付近では30cmと僅かだが深くなる。北東隅から屈曲部までの底面には、Pitや落ち等は少ない。断面形状は逆台形状を呈している。北東端と南西端ともに調査区外へ続く。

O-02SD-02はSD-01を切る。検出長5.5mでA'39.700m直線的に延びている。幅は概ね0.5mで、SD-01と重複する箇所で終息するように<br/>検出されたが、本来はSI-04方向へ延びてB'39.700mいた可能性がある。深さは概ね20cmを測り、床面の現状は、ほぼ平坦な底となって、断面形状は逆台形を呈す。

#### 出土遺物

SD-02

<u>A</u>

38~59までは全てSD-01のものである。38~44は 天井部の低い須恵器のかえり部のない坏蓋である。38 は復元口径20.9㎝、器高2.6㎝、撮み径1.7㎝を測る。 口縁端部は三角形となる。色調は内外ともに灰白色N5/を 呈す。調整は口縁から体部内外面はナデ、外面の天井部付 近はケズリ後ナデを施す。48は須恵器の壷蓋。復元口径 12.8㎝、器高2.7㎝を測る。内外面は青灰色5PB5/1の 色調を呈す。外面には自然釉が付着。口縁部から体部まで は垂直に体部へ延び、体部は直線的で天井へと続き、やや 角張った様相を呈す。49は須恵器高坏の脚部で、復元裾 部径4.8㎝、残存高2.2㎝を測る。焼成は良い。内外面の 色調は灰色N6/をなす。52~54は須恵器の高台杯。 52は高台の低いもの。53の高台端部は外にはねる。 ともに焼成は良好で色調は灰色N5/となる。55は丸底 の坏Cで口径15㎝、器高4.85㎝、高台径7.65㎝を測る。

表-3 SD一覧表

号	断面	大	きさ (m)		出土遺物	備考	뮥	断面	大	きさ (m)		出土遺物	備考
77	形状	長	幅	深	山工退物	1佣 考	7	形状	長	幅	深	山工退物	1佣 考
1	逆台形	$21.60 + \alpha$	0.54 ~ 1.13	0.18 ~ 0.28	須恵器・土師器 黒曜石(フレーク) 不明鉄器	SD-14を切る SI-02・pitに切られる 未調査区へつづく 中にpitあり	9	U字	-	_	I		
2	"	5.55+ α	0.52 0.55	0.02 0.04	須恵器、土師器 瓦、黒曜石(フレーク) サヌカイト(フレーク)	SD-1を切る 未調査区へつづく	10	"	2.02+ α	0.44	0.02 0.06		pitに切られる
3	U字	1.40	0.32 ~ 0.41	0.02 0.05	須恵器 土師器	pitに切られる	11	"	7.90+ a	1.20	0.03 ~ 0.33		pitを切る SK-01~04・pitに切られる 未調査区へつづく 中にPitあり
4	"	0.95	0.11 0.20	0.02 0.04	須恵器 土師器		12	"	1.20+ α	0.30	0.06 0.09		SK-04に切られる
5	n	0.96	0.14	0.04	土師器		13	"	0.92+ α	0.31 0.56	0.11 0.30		SI-17に切られる
6	"	2.83	0.22 ~ 0.24	0.06 0.07	須恵器 土師器	pitを切る pitに切られる	14	"	$2.12+\alpha$	0.22 0.34	0.03 ~ 0.05		SD-1・pitに切られる
7	"	2.30	0.57	0.05 0.09	須恵器、土師器 碁石?	pitに切られる 中にpitあり	15	"	0.95+ α	0.10	0.04		pitに切られる
8	"	$1.05 + \alpha$	0.32	0.04 0.11	須恵器 土師器	SI=01に切られる							

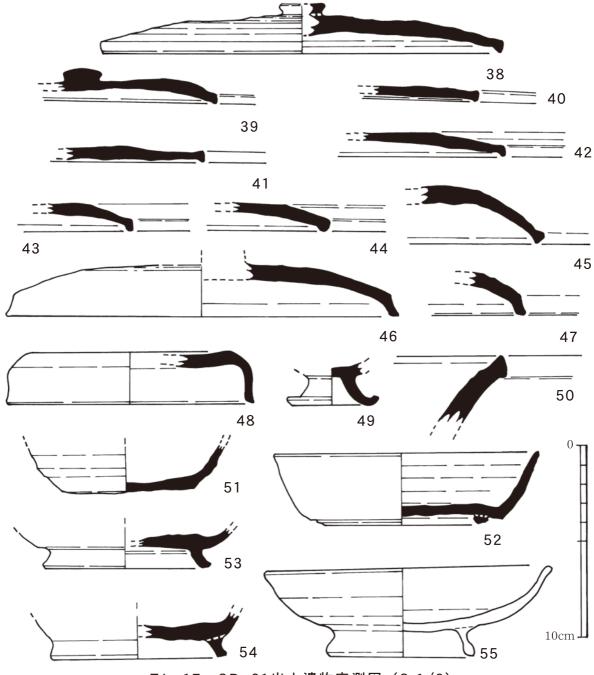


Fig.17 SD-01出土遺物実測図(S 1/2)

内外面の色調は浅黄橙色7.5YR 8/3を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は普通。**56**は須恵器の無 頸壺の口縁付近の破片。色調、内外面ともに灰白色N 7 /をなし、砂粒と黒色粒を含んだ胎土で、

焼成は普通。調整は残存部外面すべてがヨコナデ、内面の頸部から体部上半はタタキがのこる。復元口径9.2cm、残存高3cmとなる。58は須恵器の甕の口縁の破片。内外面灰色N5/の色調を呈す。いずれも小片のため復元径は測れない。59の須恵器甕は復元口径22.8cm、残存高7.3cmを測る。胎土に1mm前後の砂粒を含んで、焼成は普通。口縁付近に自然釉がのこる。調整は内外の口縁部はナデ。体部外面は格子タタキ、内面には同心円のタタキがある。

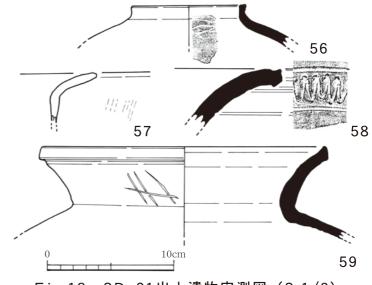
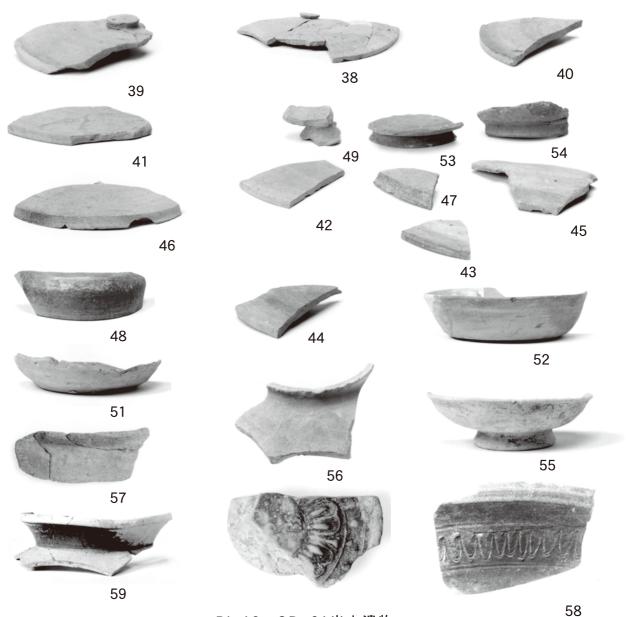


Fig.18 SD-01出土遺物実測図(S 1/3)



PL.12 SD-01出土遺物

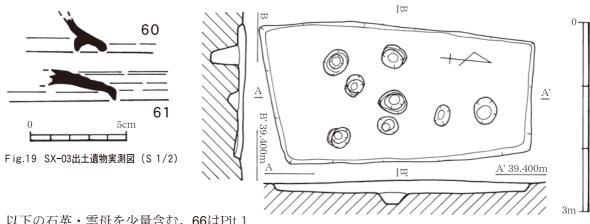
### ④SX(性格不明遺構)

SX-01は調査区の北側中央部で検出。SI-04に近接している。主軸をN-52°-Wにとる。壁の長辺は  $3.9\sim4.2$ m、短辺は $1.8\sim2.2$ mを測り南壁側が長くなるために不整な長方形の形状を呈す。SI-10 に大きさ・形状は類似するが、SI-10のように床面の硬化等が認められず、ここではSXとした。

出土遺物 埋土中から少量の遺物が出土した。60・61は須恵器の坏蓋の小片である。60の器壁は薄く、かえり部がある。口縁端部は丸く収め、かえりは深い。色調内外ともに、灰色N 6/を呈す。61は天井が低く、かえり部のない蓋。器壁は体部から天井に向かいやや厚みを増す。調整はナデにて内外ともに仕上げられる。色調は灰色N 5/を呈す。いずれの遺物も焼成は良好である。

### ⑤ Pit (柱穴)

多くのPitを検出したが、Pitの埋土や大きさ等に違いがあり掘立柱建物跡としてまとまるものはなかった。図示できたのは62~66までで、全て須恵器である。62はPit122から出土した蓋で口縁端部が三角形となる。胎土には2mm以下の石英・黒色粒を含み、焼成は良好。Pit137から出土した63は坏身の破片で、器表面の摩滅が著しく、調整が確認できない。胎土には2mm以下の石英・雲母を少量含んで、焼成は良い方である。内面の色調は灰白色10YR 8/2、外面浅黄橙色10YR 8/3を呈す。64も坏身の破片でPit181からの出土。色調は内外ともに灰白色2.5Y 7/1をなす。胎土には1mm以下の石英を含み焼成は良好である。坏の高台付近の破片65は、Pit 6 から出土。復元高台径8.8cm、残存高2.2cmとなる。高台は底部屈曲部から貼りつく。焼成は良好で胎土には3mm



以下の石英・雲母を少量含む。66はPit 1 より出土した坏で復元口径13.4cm、高台

Fig.20 SX-01実測図(S 1/60)

径9.4cm、色調は内外ともに灰白色7/Nを呈し、焼成良好。内外面の体部から底部まではナデ調整。胎土には1.5mm以下の石英・黒色粒・雲母が含まれる。高台は体部と底部境の屈曲部より内側に貼りつけられている。

### ⑥その他の出土遺物

ここでは、剥土時の遺物や確認調査の際のトレンチ埋土中のものを掲載した。67はトレンチ埋土から出土した須恵器の小型の壷で口縁部付近を失う。残存高6.45cm、底径5.7cmを測る。底部は平たくへう切り後ナデを施し、外面の頸部から体部はナデ調整。体部に7本の沈線がある。68は須恵器の蓋で口径10.4cm、器高1.95cmを測る。内面の色調は灰色N5、外面灰色N5と一部暗灰色N3/を呈す。胎土には0.5~1mm程度の砂粒を含み、焼成は普通。ロクロ回転は右である。外面天井部にはナデとケズリ、体部は内外面ともにナデ調整。69は須恵器の高坏坏部の破片である。外面には自然釉がつく。無頸壷の破片の71は残存高5.0cmを測る。内外面灰白色N7/の色調を呈

す。胎土には2㎜以下の 石英を含んで、焼成は良 好。また遺物で特長的な ものは、7個出土した土 錘であろう。遺構に伴わ ないため土錘自体の時期 は明確でない。細長いフ ットボール状の形状を呈 し、両端より穿孔される。 総体的に焼成は普通。胎 土には赤色粒を含み、長 さ3.2cm、幅1.0~0.5cm前 後となる。

### 4. まとめ

今回の調査で検出され た遺構は住居跡や土坑等 の生活遺構が主体となる。

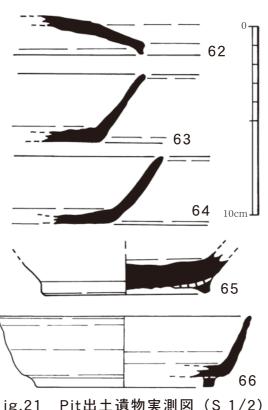


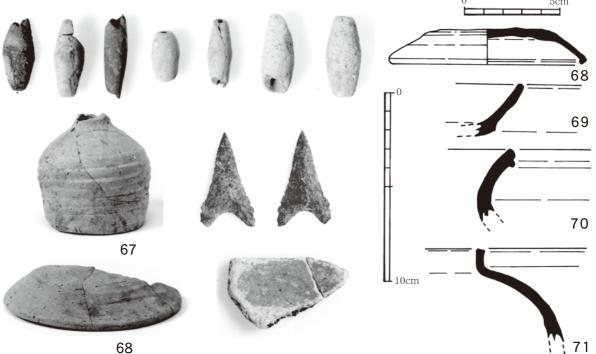
Fig.21 Pit出土遺物実測図(S 1/2)



PL.13 Pit出土遺物

67

出土した土器の時期は小田富士雄氏編年のVI期のもので、大宰府の編年 では大宰府土器型式 I B期に該当するものが大半を占める。大宰府郭内で 発掘された同時期の集落分布は郭内北半部に集中し、しかも掘立柱建物が 主体となっている。今回の調査で確認されたのは竪穴住居跡が主体であ り掘立柱建物跡とは違いを見せる。調査区は郭内の南側に位置し、隣接す る丘陵部は大宰府の奥津城と呼ばれている箇所でもある。その周辺で確認 された、集落の有り方の一端を示すものとして興味深いものであろう。



PL.14 その他の出土遺物

Fig.22 その他出土遺物実測図(S 1/2)

### 表-4 出土土器観察表

法量の( )は推定値、復元値を示す A:色調 B:胎土 C:焼成 D:残存状況 E:その他

Fig. 番号	器 種	口径	法 量 (cm) 底 径	器高	手法の特徴	:巴調 B:加工 G:焼成 D:残存仏沈 E:そので 備 考
10-8	蓋	<u> </u>	E 注	1.2+α	内面体部~外面体部ナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰色 N 5/ B. 1mm以下の石英を含む
10-10	(須恵器) 坏 (須恵器)			4.6+ α	内面底部~外面底部ナデ ロクロ回転右	C. 良好         A. 内面 灰色 N 4/、外面 灰白色 N 7/         B. 5mm以下の石英を含む
10-5	蓋(須恵器)			2.7+ α	内面天井部〜外面かえり部サデ 外面体部回転ヘラウズリ	C. 良好       A. 内面 灰色 N 6 / 、外面 灰色 N 5 /       B. 3mm以下の石英・黒色粒を含む
10-9	蓋 (須恵器)			1.5+ α	ログロ回転右 内面天井部ナデ、かえり部ナデ 外面天井部回転ナデ ログロ回転右	C. 良好         A. 内外面 灰白色 N 7/         B. 1.5mm以下の石英・ウンモを含む         C. 良好
10-6	蓋(須恵器)			2.4+ α	内面天井部ナデ、かえり部ナデ 外面体部〜天井回転ヘラウズリ 切り回転不明	A. 内面 赤灰色 5R 6/1、外面 赤灰色 5R 5/1 B. 精製 C. 普通 D. 1/8
9-2	獲 (土師器)	(17.4)		3.4+ α	内面類部ケズリ、口縁部ナデ	A. 内面 明褐灰色 7.5YR 5/1、外面 橙色 5YR 7/6 B. 1.5mm以下の石英を含む C. 良好 D. 口縁部 1/4 E. 口縁部丹塗
17-43	蓋 (須恵器)			1.4+ α	内面天井部ナデ、かえり部ナデ 外面天井部回転ヘラナズリ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰白色 5Y 7/1・灰色 N 6/ B. Imm程の砂粒を含む C. 良好
17-45	蓋 (須恵器)			2.5+ α	内面天井〜かえり部ナデ 外面天井部回転ナデ 切り回転右	A. 内面 灰色N 6/、外面 灰白色N 7/ B. 2mm以下の石英を含む C. 良好 E. 歪が大きい
17-40	蓋 (須恵器)			0.7+ α	内外面デログロ回転右	A. 内面 灰色 N 6/1、外面 灰色 N 5/1 B. 2mm以下の石英を含む C. 良好 D.1/8
17-53	坏 (須恵器)		高台径 8.6	$2.1 + \alpha$	内面ナデ、外面回転ナデ ロクロ回転右	A. 内外面 青灰色 10BG 5/1 B. 3mm以下の石英を含む C. 良好 D. 1/4
17-42	蓋 (須恵器)			1.3+ α	内面天井部〜かえり部ナデ 外面天井部回転ヘラケズリ ロウロ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 2mm以下の石英・少量のウンモ・黒色粒を含む C. 良好 D.1/8
17-44	蓋 (須恵器)			1.5+ α	内外面ナデ ログロ回転右	A. 内外面 灰色 N 6/ B. 3mm以下の石英を含む C. 良好 D. 1/8
17-50	甕 (須恵器)			3.5+ α	口縁部ナデ ロクワ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/1 B. 2mm以下の石英を含む C. 良好
17-49	高坏 (須恵器)		(4.8)	$2.2+\alpha$	内底面ナデ、裾部ナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰色 N 6/ B. 2mm以下の石英・黒色粒を含む C. 良好 D. 坏部 1/6 脚部 1/2 強
18-56	無頸壷 (須恵器)	(9.2)		3.4+ α	内面体部上位回転ナデ・タタキ 口縁部~外面体部上位ナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 砂粒・黒色粒を含む C. 良好 D. 口縁部 1/4
17-47	蓋 (須恵器)			2.3+ α	かえり部庁 の中国転不明	A. 内外面 灰色 N 4/ B. 砂粒・ウバを含む C. 良好 D.1/16
17-41	蓋 (須恵器)			0.8+ α	内面天井部〜かえり部ナデ 外面天井部回転ヘラウズリ ロクロ回転右	A. 内外面 灰白色 7.5Y 7/1 B. 2mm以下の石英・サバを含む C. 良好 D. 1/4 弱
17-39	蓋 (須恵器)			1.7+ α	内外面行	A. 内面 灰白色 7.5Y 7/1、外面 灰白色 5Y 7/1 B. 1.5mm以下の石英を含む C. 良好 D.1/8
17-54	坏 (須恵器)		高台径 (9.2)	2.4+ α	内底面fデ・回転fデ 外面fデ ログロ回転右	A. 内外面 灰色 N 5/ B. 2mm以下の石英・赤褐色粒を含む C. 良好 D. 底部のみ 1/4
18-58	甕 (須恵器)	10.2+ α		4.6+ α	内外面打デ、外面波状紋ログロ回転不明	A. 内面 灰 N 5/、外面 灰 色 N 4/ B. 3mm以下の石英・ウンモ・黒色粒を含む C. 良好 D. 1/16 以下
	蓋 (須恵器)	(12.8)		2.7	内面体部〜外面体部ココナデ 外面天井部ハラ切後ヨコナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 青灰色 5PB 5/1         B. 0.5mm程の砂粒を僅かに含む C. 普通 D. 1/3         E. 外面自然釉付着
17-55	椀 (土師器)	15.0	高台径 7.65	4.85	内面器表摩耗、口縁部33寸デ 外面体部上位器表摩耗、体部下位33寸デ 裾部器表摩耗、外底面33寸デ	A. 内外面 浅黄橙色 7.5YR 8/3         B. 0.5mm程の砂粒を含む         C. 普通       D. 1/2
17-46	蓋 (須恵器)	20.4		2.9+ α	内面〜外面体部ロナデ 天井部ケズリ・30ナデ ログロ回転右	A. 内面 灰白色 N 7/・暗灰色 N 3/、外面 灰白色 N 7/B. 1mm程の砂粒を少々含む       C. 普通D. 1/3         E. かえり部自然釉付着
18-59	甕 (須恵器)	22.8		$7.3+\alpha$	口縁部ヨコナデ、内面頸部同心円のタタキ後ヨコナデ 体部上位同心円タタキ、外面頸部タタキ後ヨコナデ 体部上位格子状のタタキ、ロケロ回転右	B. 1mm程の砂粒を僅かに含む C. 普通 D. 口縁~肩部 1/2 E. 内外面自然釉付着・付着物有り
17-38	蓋 (須恵器)	(20.9)		2.6	内面天井部ナデ、かえり部ヨコナデ 外面天井部ヘラ切後ケズリ ロクロ回転石	A. 内外面 灰白色 N 7/         B. Imm程の砂粒を少々含む         C. 普通       D. 1/3
17-52	坏 (須恵器)	(13.85)	高台径 8.95	3.8	内面体部~外面体部下位33寸; 外底面5切後33寸; 45切後寸; 内底面仕上げ3寸; 40回転右	A. 内面 灰白色 N 7/、外面       灰白色 N 6/・灰色 N 4/         B. Imm程の砂粒を含む       C. 普通         D. 1/2       E. 外面体部うすく自然釉付着
17-51	坏 (土師器)		6.8	2.5+ α	内外面体部器表摩耗 外底面^>切後摩耗	A. 内面 灰白色 10YR 8/1・褐灰色 10YR 5/1 外面 灰白色 10YR 7/1・褐灰色 10YR 4/1 B. 0.5~1mm程の砂粒・分沢を含む C. 普通 D. 1/2 弱
18-57	(土師器)			4.3+ α	口縁部器表摩耗 外面顕都がメ	A. 内外面 橙色 5YR 6/8 B. 0.5~1.5mm程の砂粒を含む C. 不良 D. 口縁〜類部の一部
17-48	壷蓋 (須恵器)	(12.8)		2.7	内外面3つけ、外底面へ対後け、ロウロ回転左	A. 内外面 青灰色 5PB 5/1 B. 0.5~Imm程の砂粒を含む C. 良好 D. 1/4 E. 体部上半は歪み
10-4	(土師器)			7.5+ α	口線部331庁、内面体部ケバリ 外面頸部内が後331庁 外面体部上位/0ヶ/後4庁。 内面体部上性/0ヶ/後4庁。	A. 内面 にぶい複色7.57R6/3・灰褐色7.57R4/2、外面 にぶい橙色7.57R6/3 B. 0.5mm程の砂粒・ウンモを含む C. 普通 D. 口縁~体部 1/4 E. 内外面一部双付着
22-68	蓋 (須恵器)	10.4		1.95	内面天井ナデ、かえり部3つナデ 外面体部シズリ、天井3つナデ ロクロ回転右 内面体部〜外面体部下が3つナーデ	A. 内面 灰色 N 5 / 、外面 灰色 N 5 / ・暗灰色 N 3 / B. 0.5~1mm程の砂粒を含む C. 普通 D. 1/2 A. 内外面 灰色 N 5 /
22-67	童 (須恵器)		5.7	6.45+ α	内面体部〜外面体部下位33寸デ 外底面で3切後デ、外面体部沈線有り 07回転右 内底面で、内面体部〜外面体部内が3寸=	B. 1~3mm程の砂粒を含む C. 普通 D. 口縁部欠損
14-30	坏 (須恵器)	(8.0)	高台径 (4.8)	4.4	内底面ナデ、内面体部〜外面体部中位ヨコナデ 体部下位ケズリ、高台部ヨコナデ ロクロ回転右	A. 内面 暗音灰色 58 3/1・灰黄褐色 10YR4/2 外面 暗青灰色 58 3/1 B. 0.5mm程の砂粒を含む C. 良好 D. 1/3
14-29	蓋 (須恵器)			2.75+ α	かえり部ヨコデロクロ回転右	A. 内外面 灰色 N 6/ B. Imm程の砂粒を含む C. 普通 D. 口縁~天井部 1/6
14-32	(土師器)	(12.7)		5.9+ α	内面体部上位5次』? 内面頻部粘土接合痕 口縁部~外面体部上位器表摩耗	A. 内面 浅黄橙色 7.5YR8/4・視灰色 7.5YR4/1、外面 にぶい橙色 5YR 6/4         B. 0.5mm程の砂粒を少々含む       C. 普通         D. 口縁~体部上半 1/3       E. 内面口唇部以付着

Fig. 番号	器種	口径	法 量 (cm) 底 径	器高	手法の特徴	備考
14-22	台付鉢 (土師器)	<u> </u>	高台径 (12.3)	13.3+ α	内面体部〜外面体部下位ヘラミガキ 外面上位一部ハウス後シガキ? 高台部ヨコナデ、外底面組織痕	A. 内外面 明赤褐色 2.5YR 5/8 B. 1~3mm程の砂粒を少々含む C. 普通 D. 底部~体部の1/3・高台一部 E. 内底面と外面体部下位以付着
14-24	甑 (土師器)	(30.0)	(2210)	26.1+ α	内面体部577リ? 口縁部~外面体部器表摩耗 (体部一部に小/矩)	A. 内外面 黄橙色 10YR 7/8   B. 1~5mm程の砂粒・赤褐色土を含む C. 不良 D. 口縁~胴部下半1/3 E. 外面一部ススス付着
15-37	坏 (須恵器)	(14.7)	高台径 (9.6)	4.2	内面体部~外面体部下位317デ 外底面ヘラ切後317デ・ヘラ切後ナデ ロクロ回転右	A. 内外面 灰色 N5/ B. 1mm程の砂粒を含む C. 良好 D. 体部 1/7・高台部 1/2
22-69	高坏 (須恵器)			2.7+ α	内面体部~外面体部下位/デ 四如回転右	A. 内外面 暗灰色 N 3/ B. 1.5mm以下の石英を含む C. 良好 D. 坏部のみ1/10弱 E. 外面体部灰カプリ
10-7	蓋 (須恵器)			$2.6 + \alpha$	かえり部ナデ、外面体部回転ヘラナズリ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 角閃石・砂粒を含む C. 良好
13-20	甕 (須恵器)	10.3+ α		5.4+ α	内外面頸部ナデ、内面頸部指頭圧痕 内面体部上位タタネ、外面体部上位格子タタネ ロクロ回転不明	A. 内面 紫灰色 5RP 6/1・灰色 N 5/ 外面 紫灰色 5RP 6/1・灰色 N 6/ B. 4mm以下の石英・黒色粒を含む C. 良好
13-18	坏 (須恵器)		高台径 8.5	1.9+ α	内外面/デ ロクロ回転右	A. 内面 灰白色 N 7 / 、外面 灰色 N 5 / B. 2mm以下の石英・ウンモ・黒色粒を含む C. 良好 D. 高台 1 / 2
13-14	蓋 (須恵器)			$2.1+\alpha$	内外面ナデ、外面体部回転ヘラケズリ ロクロ回転右	A. 内外面 灰色 N 6/ B. 1.5mm以下の石英を含む C. 良好 D. 1/3 E. 全体に歪む
13-17	坏 (須恵器)		高台径 5.6+ a	2.7+ α	内外面ナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰色 N 4/ B. 2mm以下の石英を含む C. 良好 D. 高台 1/4
13-12	蓋 (須恵器)	5.4+ α		1.8+ α	内外面ナデ、器表摩耗 ロクロ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 2mm以下の石英・黒色粒を含む C. 良好 D. 1/16
13-16	蓋 (須恵器)	$5.1+\alpha$		$2.1+\alpha$	内面ナデ、外面天井部カキ目 ロクロ回転不明	A. 内面 灰白色 2.5Y 7/1、外面 灰白色 N 7/1 B. 砂粒・黒色粒を含む C. 良好 E. 外面ツマミ自然釉付着
13-11	蓋 (須恵器)	$3.4+\alpha$		$2.1+\alpha$	内面かえり部庁 ログロ回転不明	A. 内面 灰白色 2.5Y 7/1、外面 灰白色 7.5Y N 7/1 B. 砂粒・ウンモ・黒色粒を含む C. 良好 E. 外面体部自然釉付着
13-15	蓋 (須恵器)	5.5+ α		$1.0+\alpha$	内外面扩 1710回転不明	A. 内外面 灰白色 N 8/ B. lmm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/16
13-21	長頸壷 (須恵器)			$7.1+\alpha$	内外面 <sup>1</sup> 元" 1711回転不明	A. 内面 灰色 N 8/、外面 灰白色 N 8/ B. 2mm以下の石英を含む C. 良好 D. 頸部のみ
15-36	坏 (須恵器)			2.3+ α	内外面扩	A. 内外面 灰色 N 6/ B. 2mm以下の石英・黒色粒を含む C. 普通 D. 1/16 以下
15-35	蓋 (須恵器)	$7.0+\alpha$		1.2+ α	内外面ナデ、外面天井部回転ヘラナズリ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 1.5mm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/8 弱
13-13	蓋 (須恵器)	6.0+ a		$2.1+\alpha$	内面天井部ナデ、内面一部回転ナデ 外面天井部回転ッチッス゚リ 外面一部回転ナデ、ロクロ回転右	A. 内外面 赤灰色 5R 5/1 B. 3mm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/4
15-34	蓋 (須恵器)	8.2+ α		2.5+ α	内外面器表摩耗 1711回転右	A. 内面 灰白色 N 8/、外面 灰白色 7.5Y 7/1 B. lmm以下の石英・ウンキを含む C. ややあまい D. 1/4
22-71	無頸壷 (須恵器)			5.0+ α	内外面75° 四如回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 2mm以下の石英を含む C. 良好
14-26	蓋 (須恵器)			1.4+ α	内外面扩	A. 内外面 灰色 N 4/ B. 2mm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/16
14-25	蓋 (須恵器)			1.8+ α	内外面疗" 叮叮回転不明	A. 内外面 灰色 N 6/ B. 2mm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/16
14-27	蓋 (須恵器)			$1.1+\alpha$	内外面疗: 1711回転不明	A. 内面 灰白色 N 7/、外面 灰色 N 6/ B. lmm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/16
14-28	蓋 (須恵器)	4.5+ α		2.0+ α	内外面扩 切如回転不明	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 2mm以下の石英を含む C. ややあまい D. 1/16
14-33	甕 (土師器)	7.2+ α		7.5+ α	口縁部31才デ、内面体部上位5%リ 外面体部上位器表摩耗	A. 内外面 にぶい黄橙色 10YR 7/2 B. 3mm以下の石英・ウンミを含む C. 普通
19-61	蓋 (須恵器)	6.3+ α		1.3+ α	内外面扩 <sup>*</sup> 切如回転右	A. 内面 灰色 N 5 / 、外面 灰白色 N 7 / B. 3mm以下の石英を含む C. 良好 D. 1/16
19-60	蓋 (須恵器)	3.9+ α		1.5+ α	内外面疗" 1711回転不明	A. 内外面 灰色 N 6/ B. lmm以下の石英を含む C. 良好 D. 1/16
21-65	坏 (須恵器)		高台径 8.8+ a	2.2+ α	内外面污'、外底面板状圧痕 叻如回転右	A. 内外面 灰白色 N 7/ B. 3mm以下の石英・ウンモを含む C. 普通
21-66	坏 (須恵器)	13.4+ α	高台径 9.4+ a	3.7	内外面扩 1711回転右	A. 内面 灰白色 N 7/、外面 灰白色 N 7/・N 5/ B. 1.5mm以下の石英・黒色粒・ウンモを含む C. 良好 D. 1/3
21-62	蓋 (須恵器)	5.8+ α		2.1+ α	内外面ナデ、外面体部上位回転ナデ ロクロ回転不明	A. 内外面 灰色 N 5 / B. 2mm以下の石英・黒色粒を含む C. 良好 E. 口縁部歪み
21-63	坏 (須恵器)			3.6+ α	内外面疗'、内面体部下位回転疗' 叻四电転右	A. 内外面 灰白色 10YR 8/2 B. 1mm以下の石英を含む C. 普通 D. 1/4
21-64	坏 (須恵器)		3.0+ α	3.6+ α	内外面器表摩耗	A. 内外面 灰色 2.5Y 2/1 B. 2mm以下の石英・ウバを含む C. 普通 D. 1/4
10-3	壷 (土師器)	12.0+ α		11.2	口縁部31才, 内面体部上位5% リ 内面体部中位~底部指頭圧痕 外面器表摩耗、外面底部/5%後75	A. 内面 橙色 5YR 6/6、外面 明赤褐色 2.5YR 5/6 B. 2.5mm以下の石英・ウンモを含む C. 良好 D. 1/3
13-19	盤 (土師器)		高台径 (12.4)	2.4+ α	内外面器表摩耗	A. 内外面 橙色 5YR 6/8 B. 4mm以下の石英・ウンモを含む C. あまい D. 1/2
14-23	甑 (土師器)	(29.2)		24.6+ α	内面器表摩耗、外面ナデ一部ハナメ	A. 内面 にぶい褐色 7.5YR 6/3、外面 橙色7.5 YR 6/6 B. 7mm以下の石英・赤褐色粒を含む C. 普通 D. 1/4 E. 外面体部中位媒付着
22-70	甕 (須恵器)			3.8+ a	内外面ナデ、外面口縁突帯あり ロクロ回転不明	A. 内面 灰白色 N7/、外面 灰白色 2.5Y 7/1 B. 2mm以下の石英・ウ汗を含む C. 良好 E. 内外面に釉付着
14-31	甕 (土師器)			3.2+ α	口縁部ココナデ	A. 内面 にぶい黄橙色 10YR 7/4 外面 にぶい橙色 7.5YR 7/4 B. 3mm以下の石英を含む C. 良好

### 報告書抄録

ふりょ	がな	だざ	いふじ	じょうぼう	あと						
書	名	大宰	大宰府条坊跡								
副書	名	第1	5 5 岁	<b>吹発掘調査</b>							
巻	次										
シリー	ズ名	筑紫	野市文	文化財報告	書						
シリーズ	番号	第8	2集								
編集者	者 名	渡	邊和	1 子							
編集構	幾関	筑紫	筑紫野市教育委員会(教育部 文化財課 文化財担当)								
所 在	地	₹81	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1								
発 行 年	月日	西暦	西暦2005年3月28日								
ふりがな	ふりがな		コード		北	東	調査期間	≓E	水盂建	细术百口	
所収遺跡名	所在地	市町	订村	遺跡番号	緯	経	<b>朔</b>	調査面積		調査原因	
だざいふぁと大宰府跡	ちくしのし 筑紫野市 <sup>おおあざとうのはる</sup> 大字塔原	$\begin{bmatrix} \vec{i} & 1 \end{bmatrix}$	76	210050	33° 29' 41"	131° 29' 20"	1994.7.01 ~8.31	82	21.50m²	共同住宅 建設	
所収遺跡名 種 別		別	主	な時代	主な遺構		主な遺物	主な遺物		記事項	
大宰府跡都城跡		<b></b>	奈良		溝		須恵器	須恵器			
			平安		土坑		土師器	土師器			
					住居跔	<b></b>	土錘				

### 大宰府条坊跡第155次調査

筑紫野市文化財調查報告書

第82集

平成17年3月28日

発 行 筑紫野市教育委員会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1

TEL 092-923-1111代 FAX 092-923-9644

印刷 株式会社 ジェイ・ピー

〒818-0047 福岡県筑紫野市古賀 6-5

TEL 092-929-5370 FAX 092-929-5371